

# 夏王朝二里頭文化の刻画紋・刻紋・貼付紋土器

飯 島 武 次

## 1 はじめに

二里頭遺跡は、河南省偃師県の洛河南岸に位置する初期青銅器時代の遺跡である。二里頭遺跡を標準に、1962年以来、二里頭文化二里頭類型が設定されているが、筆者は2000年代に入って以来、その二里頭文化二里頭類型の時代は夏王朝の時代に相当すると考えるようになった。また筆者はかつて数度にわたり二里頭文化二里頭類型の土器に関して胎土、紋様、器形変化および編年について述べたことがある<sup>(1)</sup>。二里頭類型第1期から第2・3期にかけて土器の胎土と器形が大きく変化をする。この土器変化の要因は、生業の変化、穀類調理などの食生活の変化、生活様式の変化、さらに禮制用具の出現と密接に関わっていると推定されるが、ここでは二里頭類型土器に新たに出現する刻画紋・刻紋・貼付紋について検討を加えてみる。

## 2 二里頭文化二里頭類型における土器

二里頭類型土器の母体となった河南龍山文化の土器の陶質は夾砂灰陶が最も多く、ついで泥質灰陶が多く、泥質黒陶は少ない。二里頭文化二里頭類型第1期の土器は、河南龍山文化の土器と同じく夾砂灰陶を主体として、泥質灰陶、泥質黒陶が含まれるが、比較的胎土の荒い土器が多い。二里頭類型第2期の土器は、泥質灰陶が主体となり、黄白色の橙黄陶とよばれる白陶系の土器が出現する。また灰釉陶器（原始瓷器）の出現もこの時期と推定され、灰釉陶疊の存在も知られる<sup>(2)</sup>。中国における灰釉陶の出現が二里頭文化二里頭類型までさかのぼることが日本で知られるようになったのは、2003年以降のことである。二里頭類型第3・4期の土器も泥質灰陶が主で、橙黄陶、白陶、灰釉陶の類も存在する。

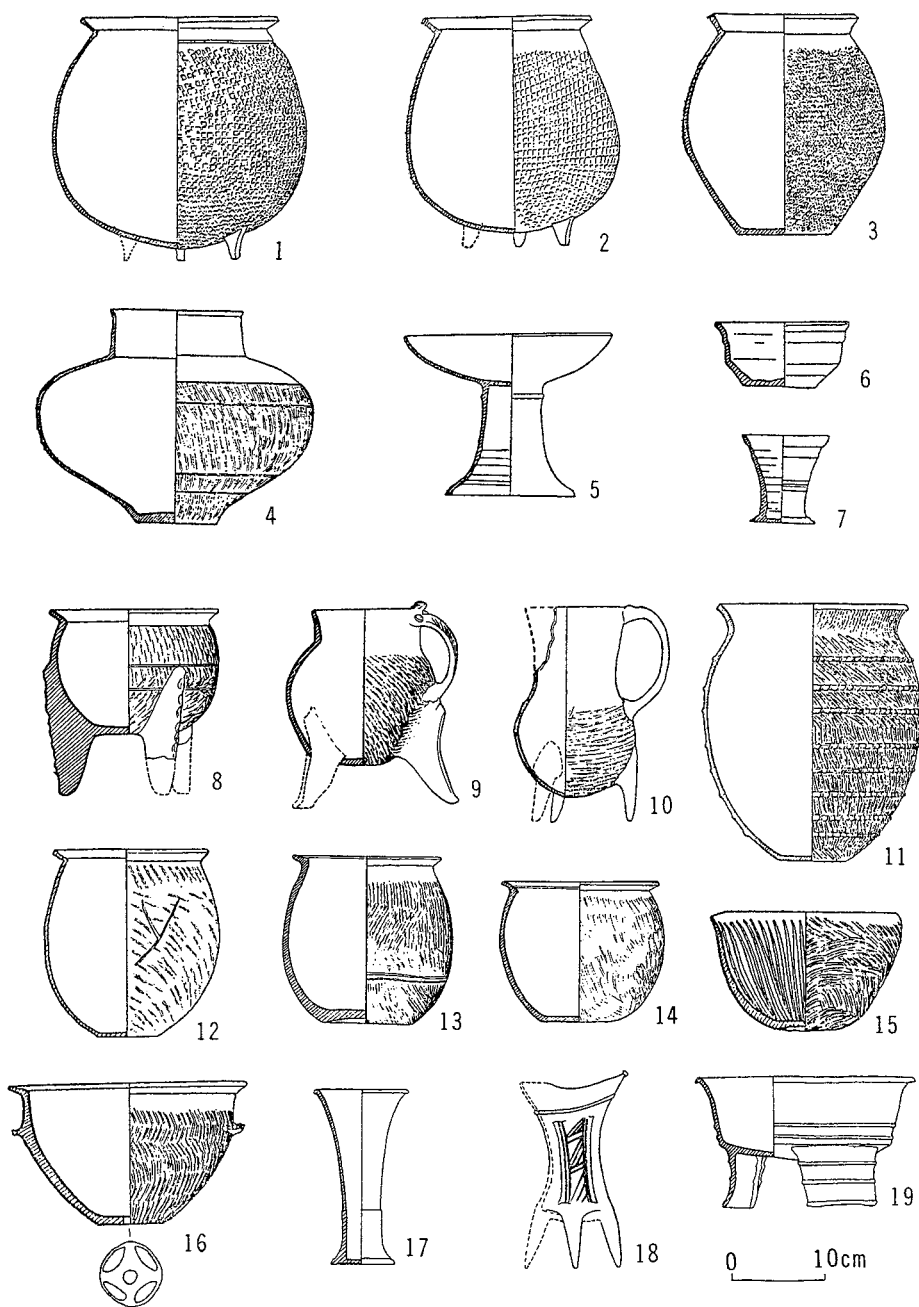
土器に施された紋様から見ると、二里頭文化二里頭類型第1期の土器には、地紋としての籃紋、細縄紋、方格紋が存在し、紋様には附加堆紋、弦紋、刺突紋、雷紋などがある。二里頭類型第2期の土器の地紋には細縄紋が多く、籃紋、方格紋も含まれ、地紋以外の紋様には弦紋、雷紋が多く、附加堆紋、縄状泥帯紋が存在する。また第2期には、本論で扱う各種の刻紋や印紋が発達し、夔龍紋系、魚紋、蛇紋、両尾龍紋などの画紋や印紋もこの時期に出現を見る。二里頭類型第3期の土器の地紋は、縄紋が

主である。地紋以外の紋様には弦紋があり、縄状泥帯紋、乳紋も存在する。夔龍紋系、魚紋、蛇紋、龍紋、雷紋などの画紋や印紋のある土器の資料数は増加し、画紋や印紋の発達を認めることができる。二里頭第4期の土器の地紋も縄紋が主である。少数の方格紋や細篋紋を見ることができる。横帯紋様の主体は弦紋で、附加堆紋や縄状泥帯紋が少数ながら存在する。夔龍紋系、魚紋、蛇紋、龍紋、雷紋などの画紋や印紋のある土器の出土数も多い。二里頭第4期併存あるいはそれに続く二里岡下層時期に入ると地紋の縄紋を主体として、紋様には弦紋、附加堆紋、縄状泥帯紋に加えて、篋書きによる幾何学的な線刻や刻紋が増加し、さらに各種の印紋と饗餐紋、夔龍紋などの紋様が増加し、紋様としての構成も煩雑な物に変化していく。

### 3 二里頭文化二里頭類型における土器器形と編年

二里頭文化二里頭類型に属する土器の器形変化と編年に関しては、過去にも述べたことがあるが、二里頭文化土器上の刻画紋・刻紋・貼付紋を考えるに当たっては、それぞれの土器が属する時代を考慮する必要があるので、改めてその概略を「二里頭文化の陶鬲と粟粥」<sup>(3)</sup>に掲載した図の一部を用いて以下に述べる。

二里頭文化二里頭類型第1期の土器器形は、基本的に河南省西北部の洛河流域に分布する河南龍山文化王湾類型第2・3期の土器器形に準じ、さらにその伝統を色濃く残している。二里頭文化二里頭類型第1期には、鼎・深腹罐・円腹罐・盆・播鉢（澄濾器）・甑・甕・壺・鬻・爵・觚・豆・杯・盤・三足盤などの器形がある（第1図）。第1期の煮沸容器としては、河南龍山文化王湾類型の伝統を受け継ぐ深腹罐・円腹罐・鼎・甑などがあるが、顕著な遺物は、鼎と深腹罐である。河南省臨汝県煤山遺跡出土の鼎は、大型の深腹円底罐に3本の小さな扁実足が付き、器壁に方格紋が施される扁三角形小足付深腹罐形鼎である（第1図の1・2）。二里頭類遺跡出土の鼎は円腹罐に3本の板鱗形の実足が付く物がそれぞれの典型で、器壁に縄紋がある（第1図の8・9）。二里頭類型第1期に属する三足の煮沸器においては、第1図の8・9に示した扁三角形足が付きの罐形鼎が優勢である。深腹罐としては比較的胴部の太い平底罐があり、腹部には方格紋や縄紋が施される（第1図の3・12）。縄紋や篋紋の施された円腹罐も広く使われている（第1図の13・14）。この時期の土器器形の中で、ほかに注目すべき器形には、穀物を蒸したであろう盆形の甑（第1図の16）、蒸した穀類を捏ねたであろう播鉢（澄濾器）（第1図の15）がある。篋紋の壺は、王湾類型第3期以来の伝統的な器形である一方、禮器の最初の姿を示す爵（第1図の18）や觚（第1図の17）の出現もあり、爵の器形はやがて青銅器に移る器形として注目される。他に三足盤もこの時期を示す代表的な器形である（第1図の19）。第1図の1から7は、煤山遺跡出土の土器で、煤山二期に属する遺物であるが<sup>(4)</sup>、二里頭遺跡で見れば、二里



第1図 土器 1～7王湾類型第3期、8～19二里頭文化二里頭類型第1期

頭類型第1期の早い時期に属すると考えられる。

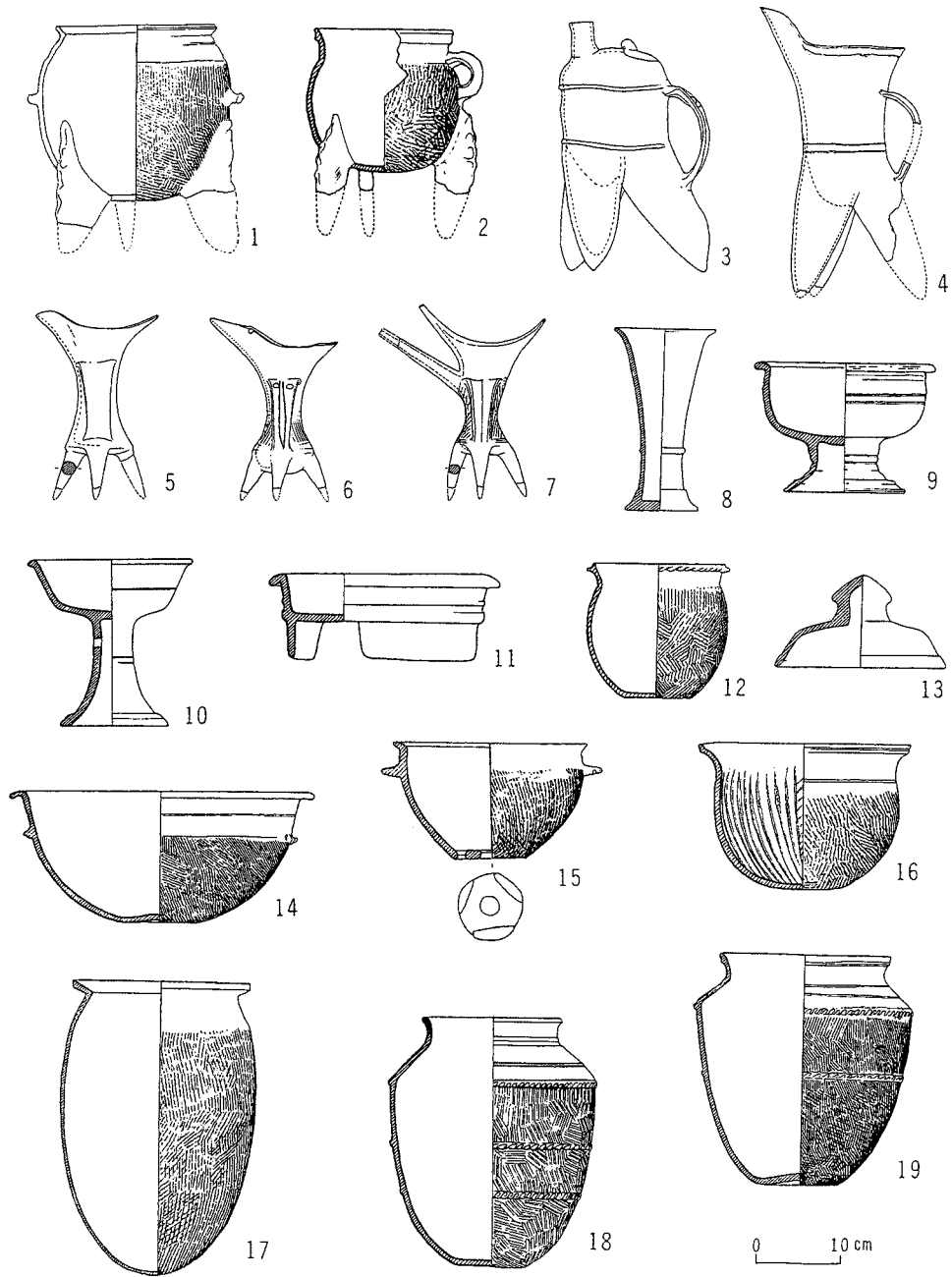
二里頭文化二里頭類型第1期の年代に関しては、C14年代測定の結果を参考にすることができる<sup>(5)</sup>。1973年10月に二里頭遺跡の九隊窯場付近のH3灰坑より二里頭類型第1期の土器と伴出した木炭(ZK-0285)の測定結果は前1605±80年で、その樹輪校正年代は前1886-前1681年であった。また1981年にV区のH29灰坑から出土した

第1期に属する木炭（ZK-1175）のC14年代測定の結果は、前1645±70年で、その樹輪校正年代は前1909-前1740年であった。

二里頭文化二里頭類型第2期に入ると第1期の鼎・深腹罐・円腹罐・盆・播鉢・甗・甕・壺・鬻・爵・觚・豆・杯・平底盤・三足盤のほかに大口尊・貫耳壺・盃・角・簋・透低器などが加わり（第2図）、また微量ではあるが鬲の出土も報告されている。この時期の煮沸容器は、第1期と同じく深腹罐（第2図の17）・円腹罐（第2図の12）と陶鼎（第2図の1・2）の類である。円底で縄紋の施された深腹罐（第2図の17）はこの時期の特色を示す。把手のある灰陶鬲も報告され、その鬲は、『二里頭陶器集粹』掲載の編年図に示されているが、詳細は不明である<sup>(6)</sup>。鬲と呼ばれる器の形には各種の器形が存在する。しかし、殷周時代の鬲は、3袋足を有し、袋足先端に逆円錐形の実足が付き、器身は鼓腹で、短頸の口縁が「く」の字に外反する器形を基本としている。二里頭文化の成立期とも言うべき二里頭類型第2期に、口縁がやや異形ではあるが基本的な鬲器形の要素を持ち合わせた土器が出現していることはきわめて重要な事実である。二里頭文化以前に、本来的に鬻・罍・甗などの袋足器が存在するのであるから、二里頭類型第2期に煮沸器としての陶鬲が出現しても不思議はない。煮沸器としては、第1期と同じく、深腹罐・円腹罐形鼎が主体であるが、河南龍山文化王湾類型中に見られた扁三角形小足付深腹罐形鼎類は、姿をけす。盆形の甗や鉢形の播鉢もこの時期の重要な器形である。さらに第2期の器形の中で注目されるのは、第1期に見られた爵に加えて、後の青銅器に見られる罍・盃・簋の器形が出現してくること、爵の器形が著しく増加することである。また鬻の類は、灰陶の外に橙黄陶や灰釉陶の遺物がこの時期から見られる。この時期に出現する大口尊（第2図の19）は、二里頭文化二里頭類型を代表する器形で、殷代二里岡文化に引き継がれていく。二里頭類型第2期に属する土器として『二里頭陶器集粹』の170・171図には、透低器と名付けられた貼り付け龍紋（蛇紋）のある特異な土器が報告されている（第14図）。

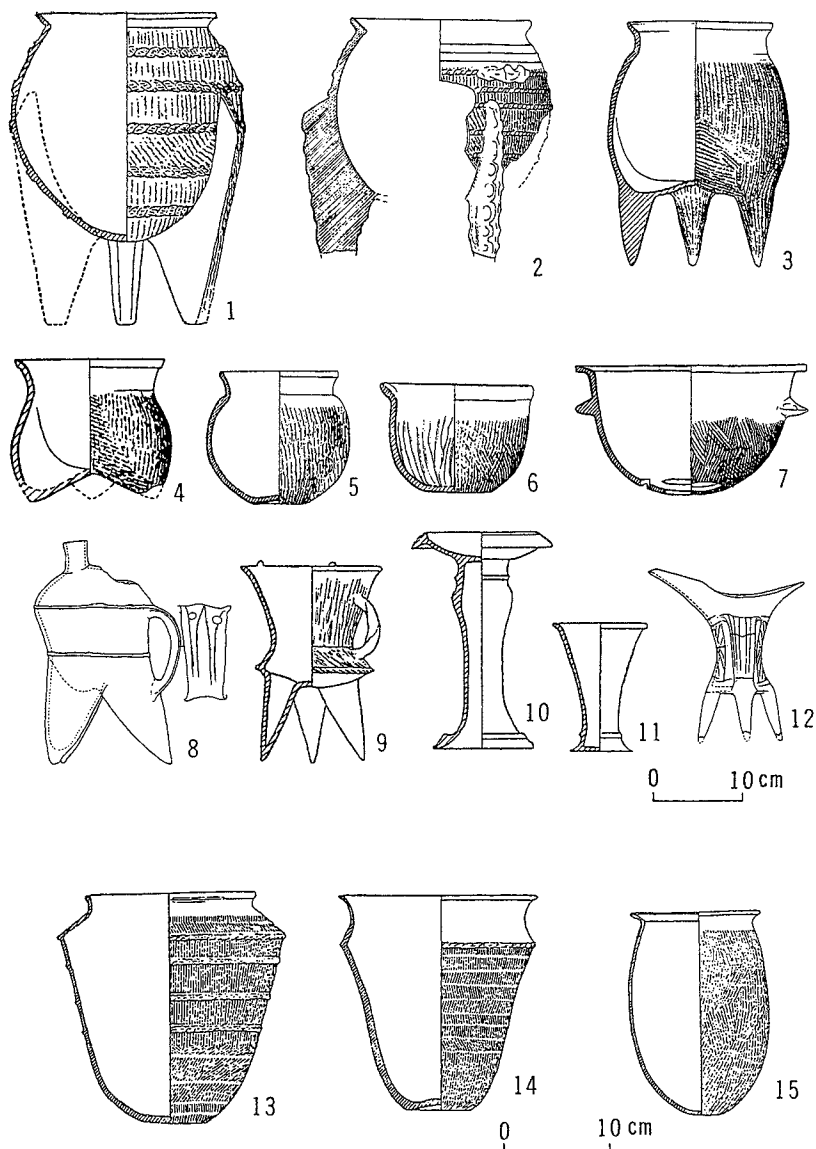
二里頭類型第2期に属する木炭（ZK-1035）のC14年代測定の結果は、前1580±80年で、その樹輪校正年代は、前1880-前1673年であった。また同じく第2期に属する木炭（ZK-1079）のC14年代測定の結果は、前1590±70年で、その樹輪校正年代は、前1880-前1681年であった。

二里頭文化二里頭類型第3期に入ると第1・2期の鼎・深腹罐・円腹罐・盆・播鉢・甗・甕・壺・爵・觚・豆・杯・平底盤・三足盤・大口尊・貫耳壺・盃・簋のほかに、鬲の数が増え、罍なども加わるが、龍山文化以来の鬻が急激に減少する（第3図）。円腹罐形鼎には、横帯の附加堆紋が施された物もある（第3図の1・2）。鬲の器形には、短頸で太い袋足の遺物もあるが（第3図の4）、短頸鼓腹出逆円錐形実足の付く鬲が認められるようになる（第3図の3）。第3図の3は、短頸で鼓腹、腹部には縄



第2図 土器 二里头文化二里头類型第2期

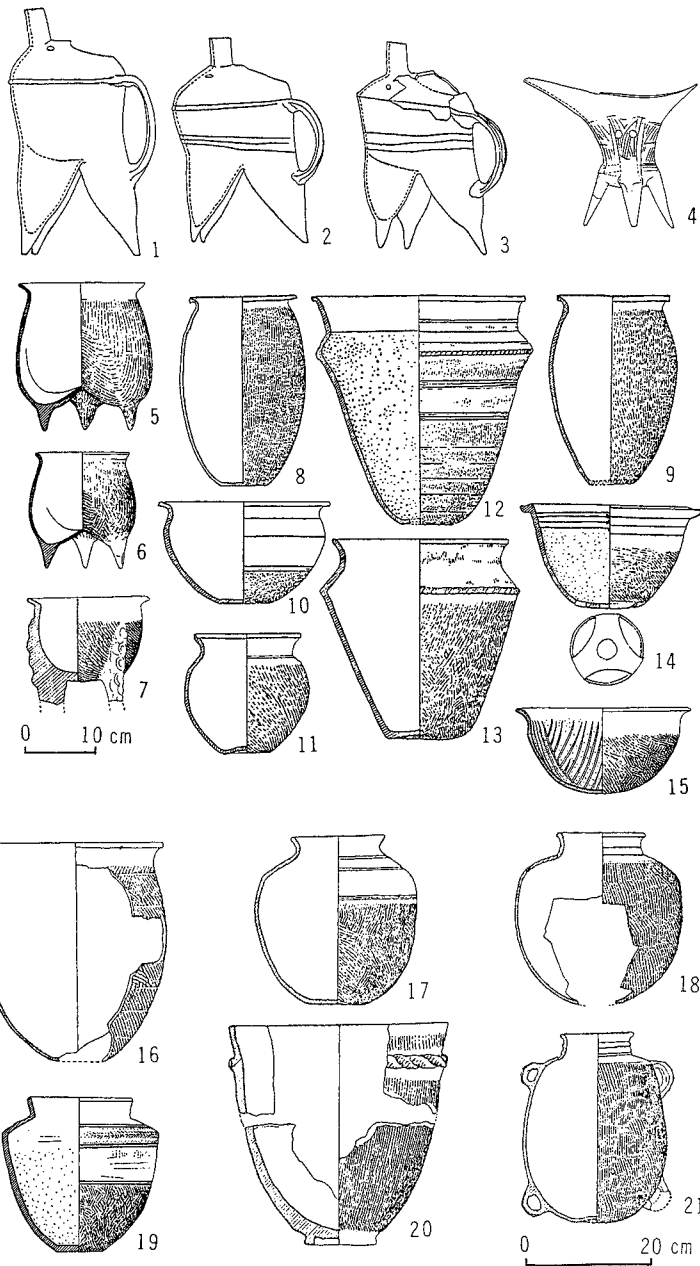
紋が施され、円錐形実足は高い。このように高い円錐形実足が、第3期陶鬲の特色とも見られる。二里头類型第3期に属する陶鬲は、河南省登封県の王城岡遺跡からもすくなく出土している<sup>(7)</sup>。煮沸器には、鬲の外、陶鼎・深腹罐が存在し、陶甗（第3図の7）もきわめて重要な煮沸具の一端になっている。深腹罐は円底の器形が多い。禮器としての盃・斝・爵・觚もこの時期の重要な器形である。陶盃の把手に貼り



第3図 土器 二里頭文化二里頭類型第3期

付けられた乳状凸瘤に関してはこれを鍛造青銅器のリベットの模倣とする考えも過去には存在したが、今日の趨勢としては説得力がない。陶爵の器形は、二里頭類型第3期に出現する青銅爵に見られ、陶盃と陶甗の器形は、第4期に出現する青銅盃・青銅甗の元となる器形である。この時期の大口尊は、大口の典型的な大口尊の器形に進化する（第3図の14）。二里頭類型第2・3期の陶片には、両尾龍紋や両頭一身龍紋の刻紋が施された遺物がある（第5・6図）。

二里頭類型第3期に属する木炭（ZK-1078）のC14年代測定の結果は、前1450±75年で、その樹輪校正年代は、前1684-前1515年であった。また同じく第3期に属す



第4図 土器 二里头文化二里头類型第4期

る木炭（ZK-1080）のC14年代測定の結果は、前1630±70年で、その樹輪校正年代は、前1896-前1705年であった。

二里头文化二里头類型第4期に入ると第3期の鬲・円腹罐鼎・深腹罐・円腹罐・盆・播鉢・甗・甕・壺・爵・觚・豆・杯・平底盤・大口尊・貫耳壺・盃・簋は依然変わりはなく、鼎の類が著しく減少し三足盤も減少する（第4図）。そして殷代二里岡文化にも見られる大口缸や四耳壺が加わる（第4図の20・21）。盆には蛇紋や魚紋が施さ

れた工芸的な遺物がある（第15図）。

二里頭類型第4期に関しては、この時期が二里岡下層に併存するとの考えがあるが<sup>(8)</sup>、そうは考えられない。二里頭類型第4期に属する爵、罍、盃、鼎などの青銅器と、二里岡下層に属する鄭州市のT166M6号墓や87M1号墓から出土した盃・爵・鬲鼎・戈などの青銅器の間には形式的な差が存在し、それは年代的な前後関係として認識される<sup>(9)</sup>。

二里頭類型第4期には、袋足で器身の太い陶盃の出土が増加するが、この盃の器形は二里頭類型の第2・3期の伝統を受け継ぐ物である（第4図の1・2・3）。爵も形の良い物が見られる（第4図の4）。鬲の類は、短頸鼓腹で、逆円錐形実足の付く後の二里岡文化の陶鬲に近い器形が増大する（第4図の5・6）。ここに夏殷周に共通する鬲文化の形が出来上がったと見る事が出来る。しかし、二里頭類型第4期の陶鬲に二里岡文化に見られる円圈紋が施された鬲は存在しない。また殷代に比較的多い甗の器形も実質的にはほとんど見られない。煮沸器としての陶鼎は著しく減少するが、円腹罐形鼎や盆形鼎が少量見られる。煮沸器としての第4期の深腹罐は平底となる（第4図の8・9）。甗は伝統的な盆形である（第4図の14）。播鉢も盆形の器形が多い（第4図の15）。

二里頭類型第4期に属するV区T13FトレンチH87灰坑から出土した木炭（ZK-0286）のC14年代測定の結果は、前1385±78年で、その樹輪校正年代は、前1625-前1430年であった。また同じく第4期に属する木炭（ZK-1034）のC14年代測定の結果は、前1405±90年で、その樹輪校正年代は、前1674-前1438年であった。

以上紹介してきた二里頭文化二里頭類型の土器は、第1・2・3・4期をそれぞれ代表する器形で、二里頭類型の編年の序列を示す物である。そこに示されたC14年代測定を元に計算された樹輪校正年代は、それぞれの時期の絶対年代を表している。

二里頭類型土器の特色と、土器が持つ歴史的意味合いを述べてみたい。二里頭文化二里頭類型土器の胎土は、第1～4期を通して主体は泥質灰陶であるが、第2期以降には橙黄陶や灰釉陶が出現する。土器の器形としては、鼎・深腹罐・円腹罐・甗・播鉢などが二里頭類型第1～4期全てに見られる。しかし鼎は、第4期に減少し、深腹罐は第4期に平底化する。鬲は第2期に1点しられるが本格的な出現は第3期以降である。二里頭類型に出現した鬲は、殷周時代の鬲文化の初源と位置づけることができる。大口尊も同じような状況で、第2期に出現するが、典型的な大口の器形が増加するのは第3期以降である。盃は第2期以降の出現と見て良いであろう。爵は第1期にも見られるが第2期以降に増加する。爵・盃・罍などの禮器の器形は、相対的に第2・3期以降の増加が認められる、あわせて、それらの器形は二里頭類型第3・4期の青銅爵や、第4期の青銅罍や青銅盃の器形に移っていく。二里頭類型第1期から第



2・3期へかけての土器の器形変化は、土器独自の変化ではあるが、その背後に、河南龍山文化の部族国家的な社会集団から夏王朝と呼ぶべき古代国家の出現があったと見て良いであろう。

#### 4 二里頭文化二里頭類型の刻画紋・刻紋・貼付紋土器

二里頭文化二里頭類型の土器には、各種の貼付紋や刻画紋・刻紋・印紋が存在する。これらの貼付紋や刻画紋・刻紋・印紋の顕著な出現は、先記した二里頭類型土器編年の第2期以降である。土器刻画紋や印紋の類としては、両尾龍紋（双身龍紋）、蛇紋<sup>(10)</sup>、魚紋、蝌蚪紋、亀紋、人物紋、動物紋、蔓紋、花瓣紋、雷紋などが存在する。

両尾龍紋土器片（第5図） 腹部から圈足にかけての二里頭類型第2期に属する土器片に両尾龍紋が描かれているが、破片のため頭と胴部のみで尾は見られない。3片の土器片を接合した幅約20cm、縦約18cmの破片である。下辺が圈足の底辺と思われる、左片に十字鏤孔が存在する。十字鏤孔の上に龍面があり鼻と二つの巨眼が表現されている<sup>(11)</sup>。巨眼は目頭・目尻が表現され、中央に円形の外凸する瞳が表現されている。龍面の額には菱形紋が施され、首部から2身に分かれていく。龍の背部には連続する菱形紋が見られる。この様な背部の菱形紋は、二里頭遺跡出土の透低器に貼付けられた蛇の背部や02VM3号墓の緑松石龍形器の背部にも見られる。龍の線刻には朱砂が認められ、巨眼には緑色の顔料が塗られる。龍面の左右には雷紋や雲紋が存在し、右龍身上には仰向けの兔が線刻されている。

両頭一身龍紋土器片（第6図） 『考古』1965年第5期の図版3に12番と15番として、別々に示された画紋土器片が、『偃師二里頭遺址研究』図版7の3番では、接合した画紋土器片として示されている<sup>(12)</sup>。この土器は二里頭類型第2・3期に属する簋などの圈足部から胴部と推定され、右側に十字鏤孔がある。この土器片の大きさに関しては詳細を知らないが、『考古』1965年第5期に示された縮尺からは、幅約37cm、縦約32cmと推測される。十字鏤孔の上に、両頭一身の龍紋が刻画されている。顔は上方を向き、身は「W」字形を呈している。左側の大きな土器片にも刻画が認められ、龍身あるいは雲気紋状の図画紋が存在する。『考古』1965年第5期によれば、鱗紋・巨眼・鋭爪が存在すると報告されているが、詳細はわからない。

目雲紋土器片（第7図） 『二里頭陶器集粹』の447図において、この土器の紋様を「雲目紋」と呼んでいるが、ここでは目雲紋の名称で呼んでおく。巨眼を主体に表現した紋様と思われる。大きさの報告はないが、同一土器の破片と思われる遺物2点が、『考古』1974年第4期に報告され、そこではこの紋様を「夔龍紋」と呼んでいる。『二里頭陶器集粹』においては、この土器を二里頭類型第4期の大口尊の肩部の土器片としているが、尊または壘の口縁部のようにも見える。この土器片は、『考

古』1974年第4期に報告された尊と同一器の口縁部下の土器片と推定されるが、土器片自体は、『考古』1974年第4期に報告された遺物とは異なるようである。上に2本、下に2本の横帯弦紋の間に3つの楕円形巨眼とその巨眼を逆「S」地紋がつないでいる。下方の横帯弦紋下には縦方向の沈線と隆帯紋のが縦格子紋認められる。『二里頭陶器集粹』によれば土器内側に魚紋があると言う。



第5図 両尾龍紋土器片図 二里頭遺跡

縦格子紋土器片（第8図の1）第7図に示した目雲紋の下段に見られる縦格子紋と同一の紋様土器である<sup>(13)</sup>。

目雲紋土器片（第8図の2）第7図に示した目雲紋の巨眼と「S」字紋の一部が認められる土器である。尊の口縁部と推定される。



第6図 両頭一身龍紋土器片 二里頭遺跡出土

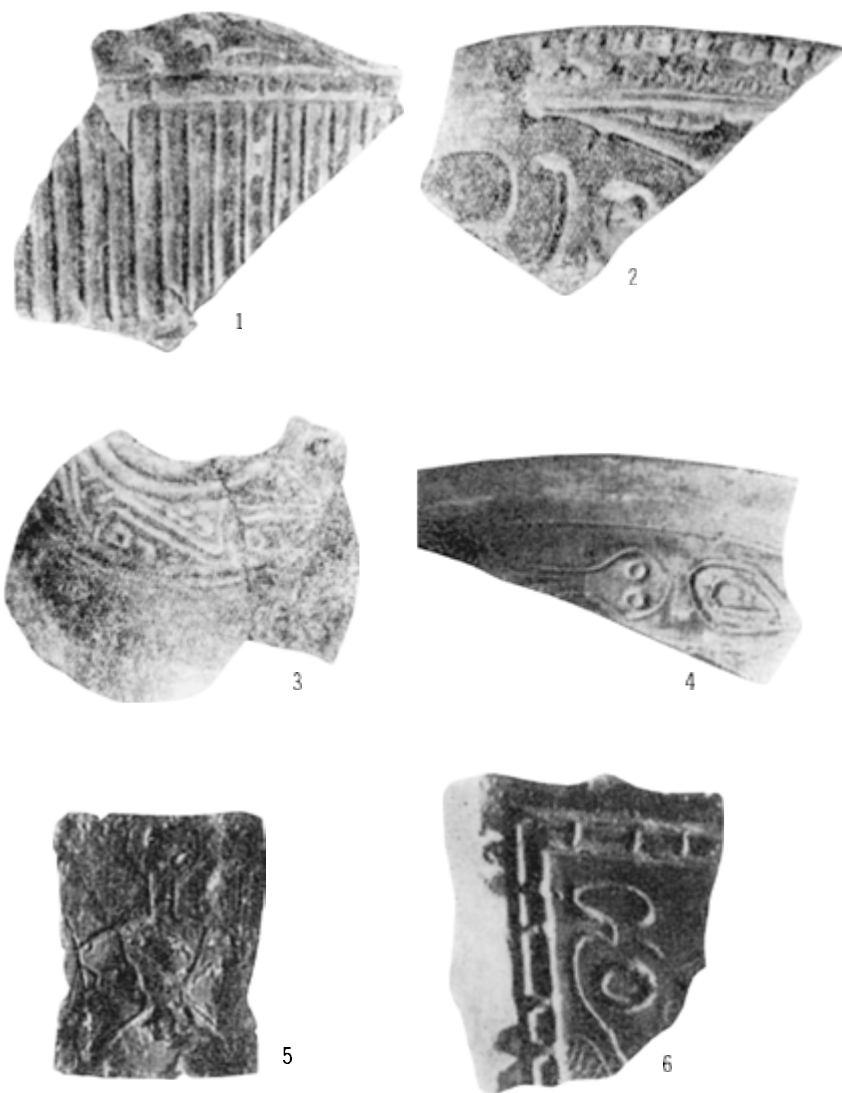
目雲紋土器片（第8図の3）目雲紋の巨眼と「Z」字紋が認められる土器である。尊あるいは壘の肩部と推定される。



第7図 目雲紋土器片 二里頭遺跡出土

蝌蚪紋土器片拓本（第9図の1）『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』29頁の図22に示された蝌蚪紋土器片の拓本である。この報告では蟬紋と称しているが蝌蚪紋で良いであろう。二つの球形の眼を有し身には格子紋が施され、尾は三角形を呈する。大きさは、報告書の拓

本である。この報告では蟬紋と称しているが蝌蚪紋で良いであろう。二つの球形の眼を有し身には格子紋が施され、尾は三角形を呈する。大きさは、報告書の拓



第8図 刻画紋土器片 二里頭遺跡出土

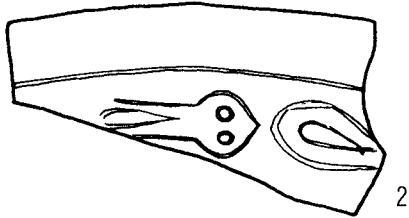
本の縮尺から幅4cmほどと思われる。蝌蚪の頭右に、前方の蝌蚪の尾が見えるので連続する蝌蚪紋と考えられる。二里頭類型第1期の遺物である。

蝌蚪紋土器片（第8図の4、第9図の2） 横位置の蝌蚪紋が刻画された二里頭類型第2期に属する擂鉢の口縁部土器片である。大きさは、『考古』1965年第5期に示された縮尺から、幅12cmほどの物と推定される。蝌蚪の右側に同心状の菱形紋があるが、何を描いた物か不明である。

人紋土器片（第8図の5） 顔から腰へかけての裸人像が彫られた二里頭類型第2



1



2

第9図 蟾蚪紋 1. 二里头類型第1期  
2. 二里头類型第2期



1



2

第10図 魚紋 1. 魚紋盆, 2. 魚紋土器片



1

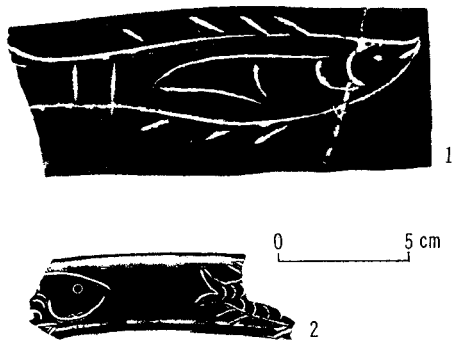
2

3

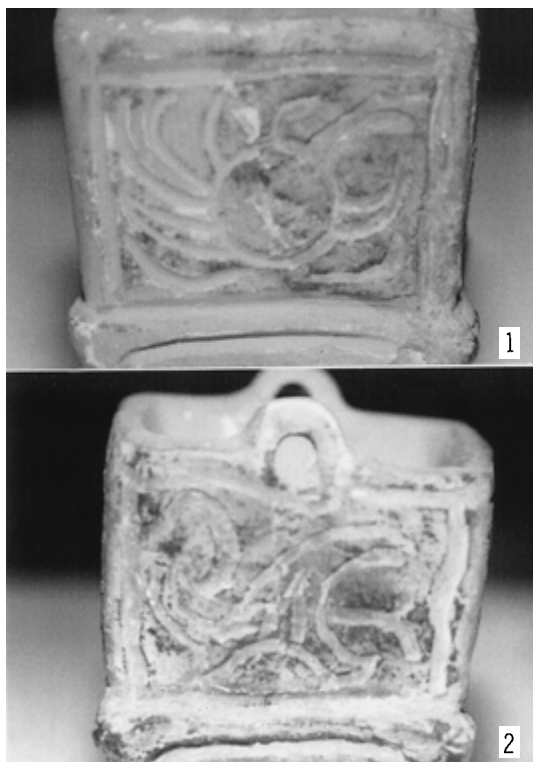
第11図 蛇魚紋盆魚紋

期に属する小杯の土器片である。『考古』1965年第5期に示された縮尺から、縦5 cm ほどの遺物と推定される。

人紋土器片(第8図の6)『考古』1965年第5期では、饕餮紋と称しているが、一種の獸面紋土器片である。元の器形は二里头類型第2期に属する小方杯と推定され



第12図 魚紋土器片拓本 二里頭類型第4期



第13図 太陽紋 二里頭遺跡

いと推定される。

魚紋土器片（第12図の1）『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』302頁の図199に示された魚紋土器片の拓本である。刻紋された魚の形状は、第11図の蛇魚紋盆の魚と全く同じである。

魚紋土器片（第12図の2）『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』302頁の図199に示された魚紋土器片の拓本である。盤の口縁部内側と推定される土器片で、左に魚頭が、右に魚尾が見え、それぞれ鱗が表現されている。

る。『考古』1965年第5期に示された縮尺から、縦5cmほどの遺物と推定される。

魚紋盆（第10図の1）『考古』1965年第5期の図版に示された魚紋のある盆である。直径22cmほどの大きさで、二里頭類型第2期に属する遺物である。この魚紋に類似した魚紋が、二里頭遺跡出土の蛇魚紋盆の口縁部内壁に描かれている。

魚紋土器片（第10図の2）『考古』1974年第4期の挿図に示された魚紋で、大きさの詳細は不明である。盆の口縁部内壁に描かれた遺物と思われるが、『考古』1974年第4期の写真が不鮮明のため魚紋の詳細は不明である。

蛇魚紋盆の魚紋（第11図） 後記する蛇魚紋盆の内壁口縁に刻画された魚紋である。盆の口縁部の3分の1が欠損するため、魚の総数は不明であるが、残存する部分には6匹の魚が確認される。第11図の1は蛇の頭から右回りの1匹目の魚である。第11図の2は蛇の頭から右回りの4匹目の魚である。第11図の3は蛇の頭から左回りの2匹目の魚である。口、尾、鰓、鱗などの表現は共通で、同一種類の魚を描

太陽紋方鼎（第13図の1） 1は、小方鼎の正面外壁に描かれた太陽の表現と思われる刻画紋である。第13図の2は小方鼎の側面画紋であるが、太陽の表現ではない様に思われる。描かれた紋様の内容は不明である。

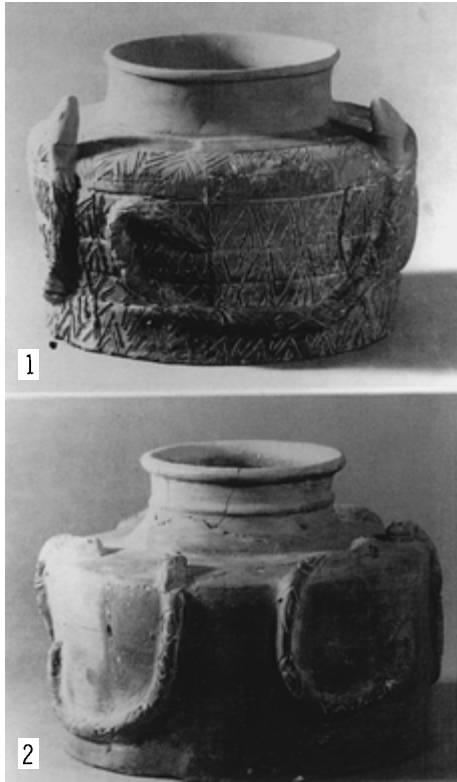
蛇紋透底器（第14の1） 二里頭類型第2期に属する透底器で、底径が22.5cmの大きさである<sup>(14)</sup>。透底器の用途に関しては不明である。器身外壁に粘土紐による3匹の蛇が貼り付けてある。頭部は欠如し復原されているが、身の部分はよく残っている。蛇の背には、連続する菱形紋が刻紋で彫ってある。蛇の身の表現は、第5図の両尾龍紋の表現に類似している。

蛇紋透底器（第14の2） これも二里頭類型第2期に属する透底器で、底径が22cmの大きさである。器身外壁に粘土紐による6匹の蛇が貼り付けてあると言う。この透底器の蛇の背には、連続する菱形紋が刻紋で彫ってある。蛇の身の表現は、第5図の両尾龍紋の表現に類似している。

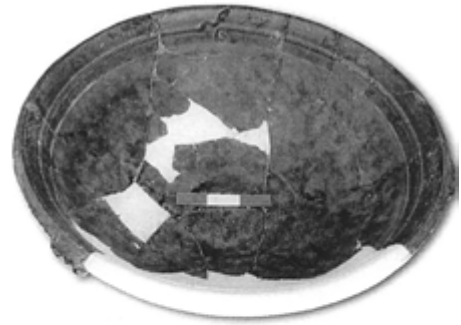
蛇魚紋盆の蛇紋（第15図） 二里頭遺跡のV区で2003年に出土した蛇魚紋盆は、一部欠けているが注目すべき遺物である。『考古』2004年第11期にこの遺物に関する記述と彩色の図版が示されている。詳細は不明であるが、二里頭類型第4期の遺物と報告されている。<sup>(15)</sup>。写真に示されている物差しを基準に考えると、直径が約45cmほどの大盆と推定される。この盆の内壁口縁部には粘土紐を貼り付けた蛇紋が表現されている。上方で首と尾が接触し、身が盆の内壁口縁部を一周しているように見えるが、先記したようにこの盆の口縁部の三分の一が欠損するため、確かに1匹の蛇が一周しているのか確認は出来ない。欠損部に尾と頭が描かれている可能性は排除できないが、まず間違いなく一匹の蛇が口縁を一周していると推定される。蛇の顔は口側の尖った楕円形で、肩部は蛇行し、尾はどくろを巻き、背には鱗が綾杉紋状に表現されている。蛇の外周には、右向きの刻紋による魚紋が複数表現されている。この盆の蛇の表現には、先の蛇紋透底器の蛇に共通する要素が認められる。

蛇頭紋（第16図の1） 『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』302頁の図199に示された蛇頭紋土器片の拓本である。幅10.5cmほどの大きさと推定される。報告では変形獣面紋と述べるが、蛇の頭と考えて良いであろう。目・鼻が刻画されている。

蛇頭紋（第16図の2） 『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』302頁の図199に示された蛇頭紋のある土器片の拓本である。右側にコブラを思わせる蛇が刻画されている。頭は小さなハート形で、首が団扇状に広がり、背には菱形紋が付く。しかながらこの第16図の2の蛇を左方向から見ると、第5図の双尾龍紋の頭ときわめて似ている。団扇状の顔の左右に縦の両眼が存在する。この両眼の表現は二里頭類型第1期の眼紋（第17図の1）と同じである。幅10cmほどの大きさと推定される。二里



第14図 蛇紋透底器 二里頭遺跡



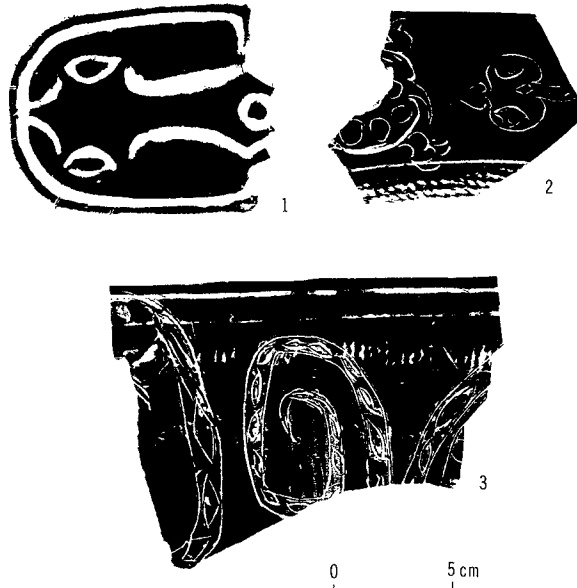
第15図 蛇魚紋盆 二里頭遺跡

頭類型第4期の遺物である。

蛇身紋（第16図の3）『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』303頁の図200に示された蛇紋のある土器片の拓本で、土器片の幅は16cmほどである。2匹の蛇が刻画された土器片と思われるが、蛇の頭部分は欠け、体部分だけが残っている。左の蛇の表現は、先の蛇紋透底器の蛇の表現に酷似し、連続する菱形紋が付いている。右の蛇には連続するレンズ状の楕円紋が付いている。二里頭類型第4期の遺物である。

亀紋（第16図の2）『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』302頁の図199に示された亀紋のある土器片であるが、先の蛇頭紋土器片と同一の拓本である。左側に亀の尾の部分と左右の後足が刻画され、甲羅には円圈紋が施される。右側に先のコブラを思わせる蛇が刻画されている。

眼紋（第17図の1）『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』48頁の図22に示された眼紋土器片の拓本である。幅4cmほどの大きさと推定される。対称する縦方向の眼が刻画されている。二里頭類型第1期に属する遺物と報告されているが、このような目の表現としては、後述する新砦遺跡出土の獣面（龍面）紋土器蓋に刻画された目の表現に次ぐ古い遺物と考えられる。



第16図 蛇紋・亀紋 二里頭遺跡



第17図 眼紋 1. 二里頭類型第1期 2. 二里頭類型第3期

眼紋（第17図の2） これも『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』198頁の図124に示された眼紋土器片の拓本である。幅8.4cmほどの大きさと推定される。二里頭類型第3期に属する遺物として報告されている。

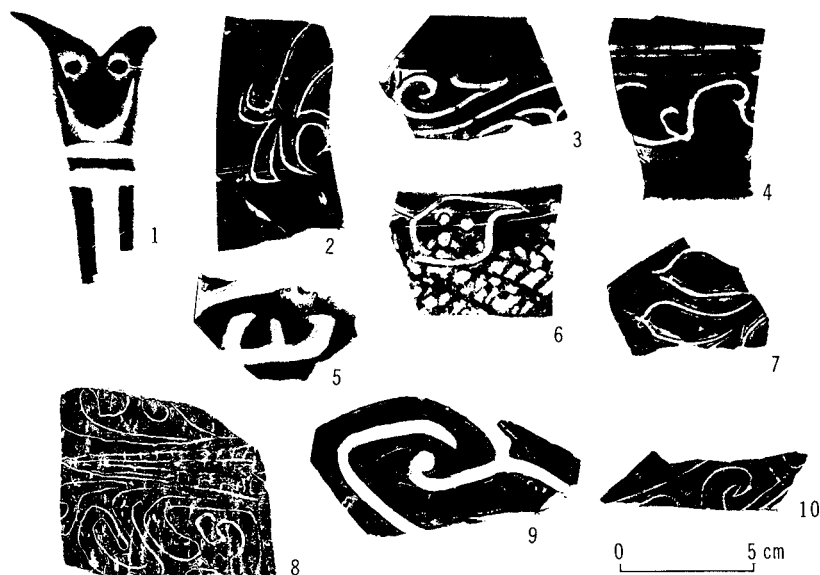
羊頭紋（第18図の1）『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』199頁の図125に示された羊頭紋土器片の拓本である。丸い目と口と2本の角が表現される。

龍爪紋（第18図の2）『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』199頁の図125に示された龍の爪を思わせる龍爪紋土器片の拓本である。

雷紋（第18図の3・5）『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』198頁の図124に示された雷紋の類である。

変形蝌蚪紋（第18図の6）『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』198頁の図124に示された変形蝌蚪紋である。報告では蝌蚪紋としているが典型的な蝌蚪紋とは呼べないので、変形蝌蚪紋とする。





第18図 刻画紋 二里头遺跡

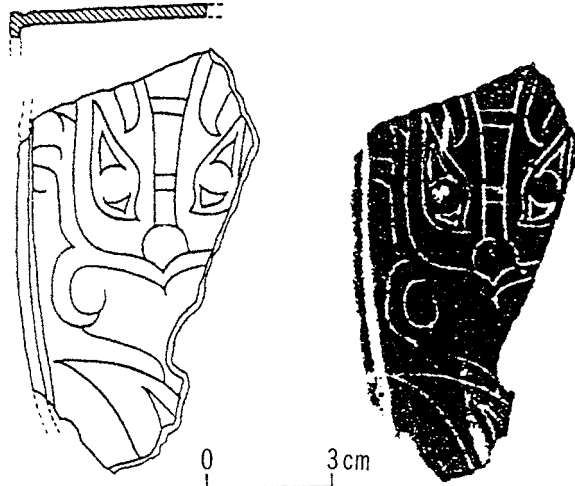
蔓紋（第18図の4・8・9・10）『偃師二里头……1959年～1978年考古発掘報告』198頁の図124に示された蔓紋の類である。9は雷紋的な紋様である。

花瓣紋（第18図の7）『偃師二里头……1959年～1978年考古発掘報告』198頁の図124に示された花瓣紋である。

獸面（龍面）紋土器蓋（第19図） 河南省新密県新砦遺跡のT 1 H 24灰坑から出土した新砦第2期に属する黒陶に獸面紋が刻画されている<sup>(16)</sup>。長さ9.5cm、幅5.8cmほどの器蓋の破片である。両眼と鼻、顔の輪郭が表現されている。『華夏考古』2000年第4期で、顧万発氏は、この紋様を「饕餮紋」の名称で呼んでいるが、饕餮紋としての確証がないので、ここでは便宜的に獸面紋としておく。しかし、新砦の土器に刻画された獸面は、後述する理由で龍面と考える方がよいであろう。獸面の目は目頭・目尻・瞳が表され、鼻は縦に通り鼻の下端は丸く表現される。この土器は、新砦第2期の終わり頃とされるから、正確には二里头類型第1期よりは若干早い時期かもしれないが、ここでは二里头類型第1期の早い時期に含まれる遺物としておく。

巾字形蕨手紋土器片（第20図の1） 河南省洛陽市の東干溝遺跡出土の土器片である<sup>(17)</sup>。土器片の大きさは不詳であるが、『洛陽発掘報告——1955～1960年洛陽澗濱考古発掘資料』の図版33の他の土器片や紋様の構成から見て、幅7cmほどの大きさと推定される。土器片の上部に横方向の2本の弦紋が認められ、その下段に傾斜した形で「巾」字形の刻紋が認められる。この種の紋様の名称を知らないが、ここでは先記の巾字形蕨手紋と呼んでおく。

雷紋土器片（第20図の2）『洛陽発掘報告——1955～1960年洛陽澗濱考古発掘資



第19図 獣面紋土器片 新砦遺跡



第20図 土器文様 1. 巾字形蕨手紋, 2. 雷紋, 3. 渦紋・円紋

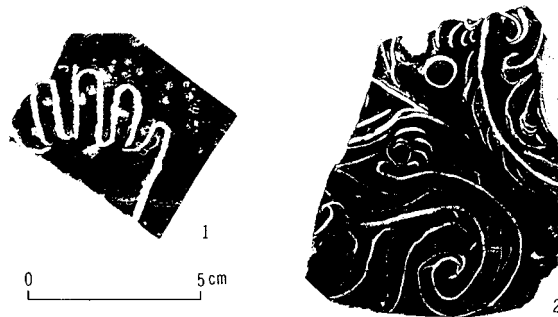
料』の図版33に洛陽市東乾溝遺跡出土遺物として示された土器片で、長さは4 cmほどと思われる。なおこの土器片の拓本が『偃師二里头……1959年～1978年考古発掘報告』の302頁に二里头類型第4期の遺物として示されている。上方に雷紋が存在し、その下に逆S字形の紋様が存在する。第5図の両尾龍紋の龍身の下に描かれた紋様に類似する。空間を蔓紋が埋める。

渦紋・円紋土器片（第20図の3）『洛陽発掘報告——1955～1960年洛陽澗濱考古発掘資料』の図版33に洛陽市東乾溝遺跡出土遺物として示された土器片であるが、長さは約5 cmほどと思われる。なおこの遺物と思われる拓本が『偃師二里头……1959年～1978年考古発掘報告』の302頁に二里头類型第4期の遺物として示されている。上段に左右対称の渦紋が、下段に左右対称の円紋が存在する。先の報告書ではこの土器片紋様を饕餮紋と呼んでいるが、饕餮紋とは関係のない紋様である。

雲紋土器片（第21図の1）河南省登封県玉村遺跡出土の黒陶系土器片の紋様である<sup>(18)</sup>。下段に横方向の3本の弦紋が見られ、その上に雲紋あるいは羽根紋状の紋様がある。二里头類型第4期に前後する遺物と思われる。



第21図 土器模様拓本 1. 玉村出土, 2. 七里鋪出土, 3. 南関外出土, 二里頭文化



第22図 土器模様拓本 1. 手紋, 2. 龍紋, 大師姑遺跡

目雲紋土器片（第21図の2） 河南省陝県七里鋪遺跡出土の土器片である<sup>(19)</sup>。第7図に示した二里頭遺跡出土の目雲紋に類似した紋様が描かれ、巨眼の周囲に雷紋ないしは雲紋が認められる。

刻紋土器片（第21図の3） 河南省鄭州市南関外遺跡出土の刻紋のある土器片である<sup>(20)</sup>。紋様の構成は明らかでないが、第6図に示した二里頭遺跡出土の両頭一身龍紋土器片の右部分を連想させる手法で刻紋が描かれている。二里頭類型第4期から二里岡下層期の遺物と推定される。

手紋（第22図の1） 河南省鄭州市の大師姑遺跡出土の二里頭文化土器片に刻まれた人の手を表現したと思われる刻紋である<sup>(21)</sup>。

龍紋（第22図の2） 同じく河南省鄭州市の大師姑遺跡出土の二里頭文化土器片に刻まれた刻紋で、報告では龍紋と呼んでいるが<sup>(22)</sup>、龍であるかどうか定かではない。刻紋の風格は、第6図に示した両身一頭龍紋土器片（『考古』1965年第5期の図版3）に類似している。

## 5 二里頭文化二里頭類型土器の刻画紋・刻紋・貼付紋に関する考察

二里頭遺跡出土の土器には、両尾龍紋・両身一頭龍紋・蛇紋などが散在している。これらの龍や蛇の表現には、青銅器や緑松石で表現された龍紋や蛇紋に共通する表現がある。中国古代における龍の概念の中で、漢代以降の龍の姿に関しては青龍や龍の壁画や画像を見ることことからその姿を知ることができる。漢代以前の龍に関しては、林巳奈夫氏の二つの大研究があるが<sup>(23)</sup>、それでもその姿は不確実である。殷周時代青銅器上には「龍」の名称で呼んでいる紋様があるが、それがはたして漢代以降の龍とつながる物なのかは不確実である。甲骨文字には「龍」と解読されている文字が存在するが、その文字が漢字の龍に繋がることは間違いないと思うが、その甲骨文字の龍が殷周青銅器紋様に見られる龍と呼ばれる紋様に繋がるかは、いささか不安である。第23図に殷代甲骨文字の中で『殷墟甲骨刻辞類纂』が「龍」とする字体を示したが、二里頭類型画紋中にこの甲骨文字の「龍」に類似する物をしらない。

しかし、漢代以前の龍の紋様を溯るとそれが殷周時代の蟠螭紋や夔龍紋・蟠龍紋に行き着くことは、間違いない。龍の元は「揚子江ワニ」であるとの説をよく耳にする。参考に横浜市野毛山動物園の揚子江ワニ (*Alligator sinensis*) の写真を示しておく(第24図)<sup>(24)</sup>。この揚子江ワニは、体長1.8mほどで、2006年3月に撮影した写真である。揚子江ワニの遺骸は幾つかの考古学的な出土例がある。山東省兗州県の王因遺跡では大汶口文化に属する11箇所(11)の灰坑から20体分以上の揚子江ワニの骨などの遺骸が発見されている<sup>(25)</sup>。また安河南省陽市殷墟遺跡侯家荘のM1217号墓からは、かつて木鼓が出土しその打面の皮は「鱗皮(ウワバミの皮)」と報告されたが(第25図)<sup>(26)</sup>、周本雄氏はそれを揚子江ワニの皮で鼉鼓であると述べるがそれでよい<sup>(27)</sup>。泉屋博古館収蔵の青銅製の夔神鼓の鼓面はまさに侯家荘M1217号墓出土木鼓の鱗皮鼓面を表現している(第26図)<sup>(28)</sup>。新石器時代から殷代に掛けての黄河流域の遺跡から揚子江ワニの自然遺物が出土することから、二里頭文化の時代に生きていた人々が揚子江ワニを見、その存在を知っていたことに疑いはない。しかし、揚子江ワニがはたして後述の緑松石龍形器の龍や蟠龍紋盤の蟠龍に図案化された物なのか否かに関しては、定かなところはわからない。揚子江ワニには、第24図の写真で見ても明らかなように立派な4本の足がある。しかし、山西省襄汾県陶寺遺跡出土の彩陶盤の蟠龍(第27図)や<sup>(29)</sup>、二里頭遺跡M3号墓発見の緑松石龍形器の龍(第28・29図)<sup>(30)</sup>、婦好墓や小屯出土の蟠龍紋盤の蟠龍に「足」の存在は認められない(第30図の1・2)<sup>(31)</sup>。婦好墓出土の蟠龍紋盤の蟠龍の周囲を取りまく3匹の夔龍には、足と太く長い尾が存在し、確かに揚子江ワニの姿に似ている。婦好墓出土の蟠龍紋盤の夔龍と揚子江ワニに関しては、関連性を考えても良いかもしれない。王の権力を象徴すると言われる鼉鼓を二里頭文



第23図 「龍」関係甲骨文字



第24図 揚子江ワニ 横浜市野毛山動物園

化の遺物中に今のところ見ないが、蟠龍の表現などから考えるに、今後出土しても不思議ではない。

両尾龍紋土器片（第5図）の龍頭に類似した紋様を描く遺物に、二里頭遺跡VI区のM11号墓から出土した獣面青銅牌飾がある（第31図）<sup>(32)</sup>。ハート形を呈する顔の輪郭、龍眼の目頭・目尻・瞳の表現は同じである。この様な目頭・目尻・瞳の表現は、二里頭遺跡のVKM4号墓から出土した玉柄形飾に見られ、みごとな線刻と浮彫で人面と獣面が施されている（第32図）<sup>(33)</sup>。ここに見られる目は、両尾龍紋土器片に見られる目と同じである。また、二里頭遺跡V区の二里頭類型第2期に属するM3号墓で発見された緑松石龍形器の龍頭の輪郭もハート形で、龍眼の目頭・目尻・瞳の表現も類似している（第28・29図）<sup>(34)</sup>。M3号墓の緑松石龍形器の龍の背中にも連続する菱形紋が存在する。両尾龍紋は殷周の青銅器の紋様に比較的多く見られる。

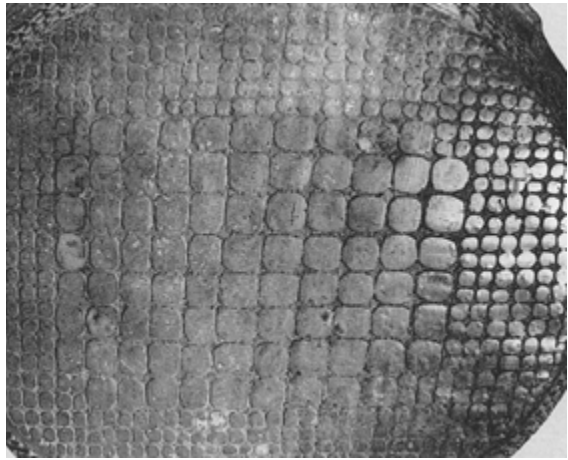
新砦遺跡出土の獣面紋土器片（第19図）の獣面の輪郭は、上部と右側がか欠けるため、詳細は不明であるが、顔輪郭の左側から下部にかけては、VM3号墓で発見された緑松石龍形器の龍頭の輪郭に類似している。新砦遺跡出土の獣面紋土器片の獣面の目は縦位置にあるが、VM3号墓の龍眼も縦位置で瞳は円形玉で表現される。新砦遺跡の獣面の鼻は4本の横線で五つに仕切られるが、VM3号墓出土の緑松石龍形器の龍鼻も四つの玉で仕切られている。VM3号墓の緑松石龍形器が名称通り龍を表現しているなら、新砦遺跡出土の獣面紋土器片の獣面は緑松石龍形器の龍頭との類似性から、龍面と呼んでよいであろう。

二里頭遺跡出土の第2期の両尾龍紋の顔面表現と同じ表現で最も古い遺物は、新砦遺跡出土の黒陶土器蓋の獣面（龍面）紋である。今知りうる限りでは、二里頭類型第1期初頭かそれより多少早い時期に、第19図に示した拓本を典型とするハート形の輪郭内に、目頭・目尻・瞳を表現し、鼻を縦に通おした獣面の概念が確立していたこと

は確かである。この獣面表現は、二里頭類型第2期の緑松石龍形器の顔面に正確に受け継がれている。また同じく二里頭類型第2期に属する土器片に刻画された両尾龍紋の顔面にも受け継がれている。そして二里頭遺跡のⅥM11号墓出土の二里頭類型第4期に属する獣面青銅牌飾（第31図）の獣面表現に受け継がれ、間違いなく饗餐紋へ変化していく。湖北省武漢市黃陂盤龍城遺跡出土の二里岡上層文化に属する青銅罍の饗餐紋拓本の顔面部分は、明らかに先の二里頭遺跡の両尾龍紋と獣面青銅牌飾の獣面表現が合体変化した図象表現である（第33図の1）<sup>(35)</sup>。第33図の1の饗餐紋には、目頭・目尻・瞳を表現した対称の目があり、額部分に二里頭遺跡の両尾龍紋と同じく菱形紋が描かれている。また第33図の1の饗餐紋における角部分内側の回転紋状の線は、第31図の獣面青銅牌飾



第25図 木鼓鼓面 侯家莊M1217号墓



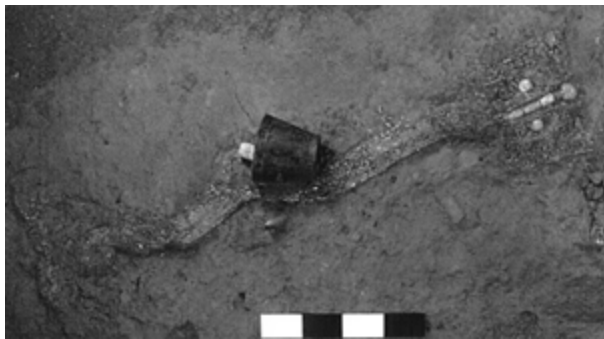
第26図 青銅鼓鼓面 泉屋博古館

の額上方の表現と同じである。この様な饗餐紋は、安陽市小屯遺跡丙区のM333号墓出土の二里岡上層文化に属する青銅尊にも施されている（第33図の2）<sup>(36)</sup>。二里頭文化二里頭類型における獣面紋あるいは龍面と呼ばれる紋様表現が、殷代前期の饗餐紋の祖形であることは明らかである。

今日饗餐紋と呼ばれている紋様は、しばしば獣面紋とも呼ばれるように正面から見ると、中央に大きな鼻があり、左右に巨眼が配置された獣面の様相を呈している。巨眼の上には角があり、巨眼の左右に耳が描かれる場合もある。これらの鼻・巨眼・角・耳の間の空間は、雷紋と呼ばれる細い渦巻き紋で埋められていることが多い。饗餐紋の鼻を中心に左右に分けると怪獣の側面を表現している場合も多く、この怪獣の姿を夔龍と呼ぶこともある。饗餐紋の起源は、新石器時代後期時期にあたる良渚文化や龍山文化の玉器や土器に表現された獣面紋ではないかと推定されることもあるが、定説はない。二里頭類型の獣面紋に見られるハート形の輪郭内に、目頭・目尻・瞳を表現



第27図 彩陶螭龍紋盤 陶寺遺跡出土



第28図 緑松石龍形器 二里頭遺跡VM3号墓

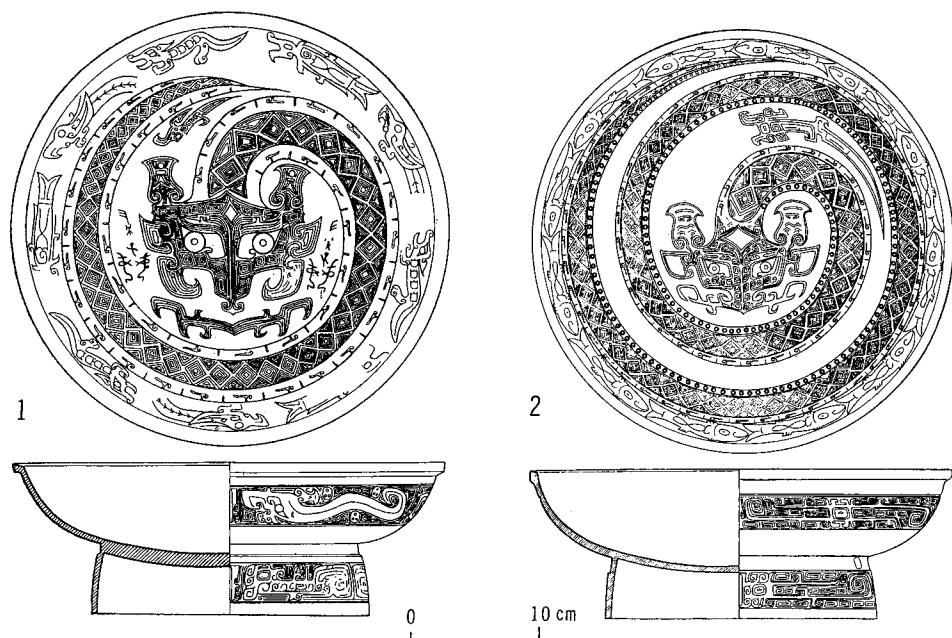


第29図 緑松石龍形器顔面 二里頭遺跡VM3号墓

し、鼻を縦に通おした獣面が、二里岡上層文化の饗饗紋に引き継がれていることから、今日饗饗紋と呼んでいる紋様の祖形は先記したように二里頭類型中の獣面紋にあると見て良いであろう。

「饗饗」の名称は『呂氏春秋』や『春秋左傳』などの漢代や東周時代の古典に見えている。饗饗紋の意味については、そこに表現された巨眼を邪視と考え、しばしば魔除けであると言われているが確かではない。また饗饗紋に関しては、これを貪婪な悪獣である饗饗の形とする説もあるがこれも定かではない。また饗饗を殷代の自然神・遠祖神の姿と考える説がありこれは確実性が高いようにも思える。いずれにしろ饗饗の名称は、『呂氏春秋』に「周の鼎に饗饗を著す。首あって身なし。人を食らいて未だ吞まざるに、害其の身に及ぶ」<sup>(37)</sup>とあることによって、宋代の学者が青銅器に鑄造された獣面紋に対して名付けた名称である。宋代はもとより春秋戦国時代でさえ、饗饗紋はす

でに廃れ、殷代・西周時代に盛行した饗饗の意味は曖昧になっていたのである。従って今日、我々が饗饗紋と呼ぶ獣面の紋様が、『呂氏春秋』や『春秋左傳』などの前漢、東周時代の古典の中に見えている饗饗紋であるか、否かは定かでない。当然、二里頭文化中の獣面紋も、それらの古典文献に言うところの饗饗と関係があるのか、否かは不明である。



第30図 螭龍紋盤 1. 婦好墓 (M5:777), 2. 小屯M18号墓 (M18:14)

両尾龍紋は殷周時代の方鼎・卣・壺などの青銅器の口縁や蓋に比較的多く見られる。第34・35図に殷周青銅器に施された両尾龍紋を示した。両尾龍紋を表した殷周青銅器には、陝西省扶風県白龍村出土の姁姁康方鼎（第34図の1）<sup>(38)</sup>、台北故宮博物院蔵の作册大方鼎（第34図の2）<sup>(39)</sup>、陝西省眉県鳳池村出土の父辛方鼎（第34図の3）<sup>(40)</sup>などがあり、乳釘紋のある方鼎によく施されている。また、上海博物館蔵の「或父癸方鼎」（第35図の1）<sup>(41)</sup>や1975年に北京市房山区の琉璃河遺跡で出土した「圉龍紋方鼎」（第35図の2）<sup>(42)</sup>などにも両尾龍紋が施され、龍身には小札状の鱗が見られる。このような青銅器に見られる両尾流紋は、比較的西周前期の遺物が多い。二里頭類型の両尾流紋の伝統を受け継いでいると見て良いであろう。

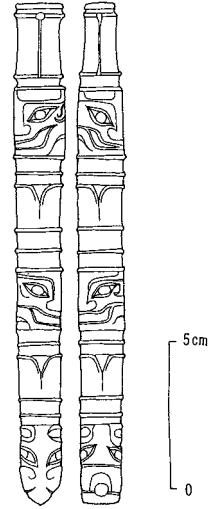
安徽省阜南県朱寨区常廟郷月牙河遺跡の龍虎尊には、一頭双身の虎が表現され、虎の額には菱形紋が存在している（第36図の1）<sup>(43)</sup> 四川省広漢市の三星堆遺跡1号祭祀坑から出土した龍虎尊にも、一頭双身の虎が表現されている（第36図の2）<sup>(44)</sup>。いずれも虎の表現ではあるが、二里頭類型の両尾龍紋の伝統を受け継いだ図案であることに間違いはない。これらの殷墟期の龍虎尊の肩部に、虎が大口を開け人を呑み込みんとし、未だ呑み込まざる姿が鑄造されているが、戦国時代から漢代に至ることによるとこの様な殷周期の紋様を饗餮と認識したのかもしれない。宋代に至ると今我々が饗餮紋と呼ぶ獣面紋を饗餮紋と呼ぶように変化したのかもしれない。

二里頭類型中の土器には、粘土紐によって蛇を表現した遺物が少なくない。二里頭

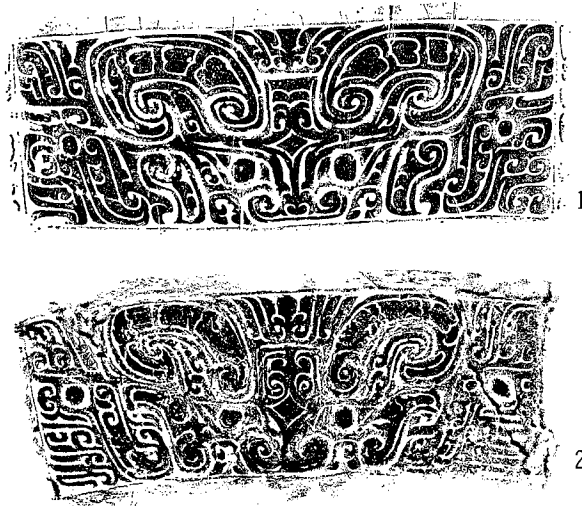




第31図 獸面青銅牌飾 二里頭遺跡VI M11号墓



第32図 獸面紋玉柄形飾 二里頭遺跡



第33図 饗饗紋 1. 盤龍城・壘, 2. 小屯・尊 二里岡上層文化

類型の土器に刻画される実在する動物には、蛇・亀・魚がある。特に蛇と魚が注目される。先に紹介した第14図の透底器に見られる蛇紋などがその典型である。中国社会科学院考古研究所が二里頭遺跡で2003年に発掘した新出土資料の蛇魚紋盆の口縁内側に沿って一周する一匹の蛇と先の両尾龍紋の関係が気になるところであるが、その関係は定かでない。第6図は両頭一身の龍と解釈したが、両頭蛇とも見える。中国では両頭蛇を見た者は死ぬとも言われたが、その両頭蛇は、『大漢和辞典』（諸橋轍次）によれば首と尾に頭のある蛇とも言う。生物学的には、首と尾に頭のある蛇は存在しないと思う。身から2本の首が分かれる両頭蛇は存在し得るので、第6図の両頭一身の龍は、身から2本の首が分かれる両頭蛇から出た表現かもしれない。第16図の3の

土器片拓本の蛇の表現は、先の透底器に見られる蛇紋と同じ連続する菱形紋が施されている。殷代の甲骨文字中には資料例は多くはないが「它（へび）」の文字が存在し（第37図）、その甲骨文字の蛇は第16図の2の蛇に近い形とも見え、第37図の4・5には蛇の背中に二里頭類型の蛇紋に見える菱形紋が存在する。二里頭文化二里頭類型と殷後期の甲骨文字「蛇」の間には、当然時間的、地域的な差が存在するが、にもかかわらず共通した表現が認められる。蛇は、今日の中国に於いて食材の一つである。原始古代においても身近な爬虫類であったと推定される。

身の長い動物の表現としては、山西省襄汾県陶寺遺跡のM3072号墓から出土した山西龍山文化陶寺類型の彩陶盤に、先に紹介した動物紋がある（第27図）<sup>(45)</sup>。報告書は、これを蟠龍と呼んでいる。蟠龍はどくろを巻いている

龍である。「蟠」はまがる、めぐるの意味である。彩陶盤の動物はどくろを巻き、長い舌を出し、綾杉紋状の鱗が見られる。蛇から出た画紋とも見られるし、またチョウザメのような魚のようにも見える。黄海沿岸・東海沿岸、黄河・長江にも各種のチョウザメが生息していたようであるが、長い舌を出すところはトカゲのようにも見える。中華鱘（チョウザメ・*Acipenser sinensis*）や達氏鱘（チョウザメ・*Acipenser dabryanus Dumeril*）がその代表である。また殷周時代には、内底に蟠龍紋の描かれた青銅盤が存在する。たとえば、河南省安陽市の殷墟遺跡婦好墓出土の蟠龍紋盤や小屯M18号墓出土の蟠龍紋盤に描かれた蟠龍はどくろを巻き、顔が盤底の中心にある（第30図）<sup>(46)</sup>。蟠龍の額には菱形紋があり、これは二里頭遺跡M3号墓出土の緑松石龍形器の顔と同じである。また背に見られる菱形紋も二里頭遺跡の緑松石龍形器や透底器の蛇に共通している。殷墟遺跡婦好墓出土の蟠龍紋盤や小屯M18号墓出土の蟠龍紋盤の外周には、魚紋を含む紋様が施される。婦好墓の蟠龍紋盤では、外周に左向きの魚、夔鳳、夔龍が一組となって、順次描かれている。ここでは夔鳳、夔龍と並んで



第34図 兩尾龍紋 1. 姁姁康方鼎  
2. 作册大方鼎  
3. 父辛方鼎



第35図 両尾龍紋 1. 或父癸方鼎  
2. 圉龍紋方鼎

魚が重要な意味を持つことがわかる。小屯M18号墓の蟠龍の外周に描かれるのは連続する魚紋である。どくろをまく蟠龍の外側に魚を描く割付は二里頭遺跡出土の蛇魚紋盆の一周する蛇の外側に魚を刻紋する割付と共通している。中央研究院歴史語言研究所収蔵の殷墟遺跡小屯M331号墓出土の白陶壘蓋には、円形の蓋を一周する蟠龍紋が彫られている（第38図）。この蟠龍は横向きで、口を開け、巨眼を有し、身には菱形紋が連続し、先の揚子江ワニ側面の姿を連想させるが、ワニが当然持っている足の表現はない。しかし、殷墟遺跡婦好墓出土の玉龍には足を彫りだした遺物がある。これらの諸要素から、陶寺遺跡の彩陶盤の蟠龍紋、二

里頭類型の蛇魚紋盆の蛇紋、殷周青銅盤や白陶壘蓋の蟠龍紋が、一連の繋がりを持っていることは明らかである。従って想像上の動物である蟠龍の概念は、陶寺類型から二里頭類型を経る中で形成され、殷墟期にその姿が継承された紋様と思われる。

二里頭文化二里頭類型に属する土器に刻紋された魚にも、注目される古代人の魚に対する特別の概念が存在しているように思われる。土器に魚紋を描く風習は、仰韶文化半坡類型の彩陶盆に多く見られるが、龍山文化の土器にはあまり知らない。殷周青銅器には魚紋を描いた物をしばしば目にするが、その一例が第30図の蟠龍紋盤などである。殷周玉器には玉魚が存在し<sup>(47)</sup>、西周墓には貝魚が存在し<sup>(48)</sup>、西周・春秋墓には青銅魚が存在する<sup>(49)</sup>。

第11図の蛇魚紋盆と第12図の1の土器片に刻画された魚は、口、脇鰭、背鰭、尾鰭などを見ると、同一種の魚で鯉科の魚と推定され、草魚あるいは大白魚である可能性が高い。

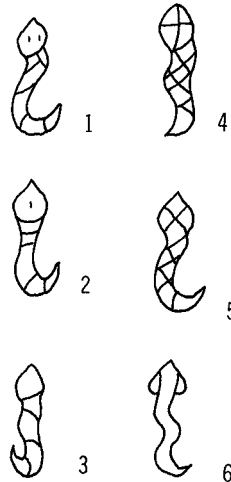
二里頭文化中には、先に紹介した第16図の2の亀の刻紋が存在するが、ほかに二里頭類型第3期に属する亀甲形の土製品も発見されている（第39図）。これらの遺物からは、二里頭文化期に亀が特別の意味をもって認識されていたことが推定される。殷代の遺物中にも、亀や鼈（スッポン）を表現した図象記号や甲骨文字が存在する。鄭州殷故城の宮殿区からは土器の刻画紋に亀が表現されものが出土している<sup>(50)</sup>。また

青銅甕の口縁に鑄造された図象記号に亀が認められる<sup>(51)</sup>。この図象記号は、きわめて鮮明で図案化された亀で、甲羅には巴状の紋様が描かれている。二里頭文化中の土器には、先に述べた蛇の図案が多数存在する。亀と蛇が結合すると漢代の四神の一つである玄武となる。

蝌蚪紋の蝌蚪は、オタマジャクシである。二里頭遺跡出土の蝌蚪紋に類似した紋様は乏しいが、蝌蚪紋の例としては、上海博物館に収蔵されている白陶尊と白陶尊土器片（第40図）に施された蝌蚪紋がある。いずれも尊の口縁部を横方向に連続する蝌蚪紋で、蝌蚪の顔は二里頭遺跡出土の土器片の両尾龍紋の顔にきわめて類似している。蝌蚪の身側には対称となる鱗がつき、尾は燕尾形である。両尾龍紋の顔と白陶尊の蝌蚪紋の顔を比較するとこの両者に文化的伝統関係が無いとは考えられない。蝌蚪紋に類似した紋様に横方向に連なる蟬紋がある。殷後期の白陶や青銅器にその例を見ることが出来るが、殷墟遺跡婦好墓出土の父乙鼎（GM1573：1）の横に連なる蟬紋（第41図）は<sup>(52)</sup>、二里頭類型第1期の土器片の蝌蚪紋（第9図の1）からの図案上の継承を伺わせる。



第36図 龍虎尊 1. 安徽省月牙河 2. 四川省三星堆



第37図 「蛇」関係甲骨文字



第38図 螭龍紋白陶甕蓋



第39図 亀甲形土製品 二里頭遺跡二里頭類型第3期



第40図 蝌蚪紋白陶尊土器片



第41図 父乙鼎の蟬紋

眼紋や目雲紋は、二里頭文化二里頭類型の土器の刻画紋に出現するが、殷代二里岡文化や殷墟文化の土器片にも継承されて多くの資料例がある。二里頭類型の眼目には2種類がある。一つは、すでに紹介してきた新砦遺跡出土の土器蓋の獣面紋に描かれた上下目蓋・瞳・目頭・目尻を表現した物である(第19図)。この目の表現は二里頭類型第1期の土器の刻画に見られる外、第3期の土器の刻画にも見られる。また、両尾龍紋(第5図)や緑松石龍形器(第29図)、獣面青銅牌飾(第31図)、獣面紋玉柄形飾(第32図)の目の表現も同じである。このような眼目は二里岡期から殷墟期、西周時代へかかる三代の青銅器や土器の画紋などの遺物に無数に見られる。第33図の1は、湖北省武漢市黃陂縣盤龍城遺跡採集の青銅甕に施された二里岡上層文化の紋様拓本で、見事な饗餮紋の眼目が表現されている。第33図の2は、河南省安陽市小屯殷墟遺跡丙区M333号墓出土の殷墟文化に属する青銅尊の饗餮紋拓本で、同じく見事な眼目がある。第42図の1・2・3は、鄭州市二里岡遺跡出土の土器に見られる饗餮紋の眼目である。上下目蓋・瞳・目頭・目尻の表現された二里頭文化以来の伝統的な眼である。二つ目は、楕円形・球形の眼目である。第42図の4・5・6・7には、鄭州市二里岡遺跡の土器に見られる楕円形・球形の眼を示した。第42図の4・5は二里岡文化の饗餮紋の目であるが、二里頭類型の土器の楕円形・球形の眼紋は、単独で存在して対の眼としての顔面や饗餮を形成しない。

第7図、第8図の2・3、第21図の2に二里頭文化二里頭類型あるいはその時期に併存する文化の目雲紋を示したが、殷代二里岡文化の青銅器や土器の紋様にも同系統の目雲紋が存在し、それらを第43図に示した。1は、湖北省武漢市黃陂縣盤龍城遺跡出土の青銅觚の圈足に見られる目雲紋である。2は、

同じく盤龍城遺跡出土の青銅鬲の口縁部に施された連続する目雲紋である<sup>(53)</sup>。3は、殷墟遺跡出土の白陶罐の肩部に見られる目雲紋で、「S」字状の沈線が楕円形の眼を繋ぎ、空間を雷紋が埋めている<sup>(54)</sup>。二里頭類型の目雲紋は土器破片が多く、全体の図案が必ずしも定かでないが、二里頭類型の目雲紋の基本を二里岡文化の土器の目雲紋に見ることが出来ると考えて良いであろう。

二里頭類型の楕円形や円形の眼目が何を意味しているのか定かではないが、二里岡文化の楕円・円形の眼目が饗饗を形作る所から、単独の楕円・円形眼目も饗饗紋に似た意味を持つと推定したい。邪悪な物を見据える意味があるのかもしれない。

## 6 おわりに

二里頭文化土器に刻画紋・刻紋・貼付紋の顕著な出現を見るのは、二里頭文化二里頭類型第2期以降である。これら各種の刻画紋・刻紋・貼付紋の出現の背景には、社会の大きな変革、つまり夏王朝の存在があったと推定されるが、その社会的変革と各種刻画紋・刻紋・貼付紋の出現の因果関係を示すことは難しい。

二里頭文化土器の刻画紋・刻紋・貼付紋には、殷代の饗饗紋・巨眼紋・目雲紋・蝌



第42図 土器饗饗紋・眼紋



第43図 目雲紋

蚪紋などの祖形的な紋様が存在する。二里頭文化に見られる龍紋・蛇紋・獣面紋・巨眼紋が後の饗饗紋と関係を持つであろう事は、表現された目の表現からも伺われる。龍紋・蛇紋と蟠龍紋の関係は、現存する揚子江ワニの姿を介して想定される。漢代以降になると考古学的遺物に青龍や龍の表現をしばしば目にする。青銅器の紋様に見られる夔龍や螭龍の紋様が、漢代以降の龍に繋がる証拠はないが、直感的に揚子江ワニの存在が、中国古代の龍の概念に結びつくように思われてならない。二里頭類型の土器には、蛇や亀のそれぞれ単独の図案が見られる。漢代には、亀と蛇が結合した玄武の図案が存在する。二里頭類型に見られる亀と蛇が、四神の玄武に繋がっていく証拠は何もないが、結びつかないと言い切ることも出来ない。二里頭類型土器に見られる目雲紋は、殷代青銅器に同じ紋様が多数検出されるが、二里頭文化土器に表現された各種の刻画紋・刻紋・貼付紋は、夏文化が残した文化遺物で、殷文化芸術表現の源と成っている。

本論文は、平成17年度駒澤大学特別研究助成金（共同研究）「東アジア考古学における遺跡と遺物の総合的研究——特に中国渭河流域における遺跡調査を中心に」による研究成果の一部である。なお共同研究の主体となった渭河流域における遺跡調査に関しては、附記として以下に調査活動報告をのせておく。

## 附記

平成17年度駒澤大学特別研究助成金（共同研究）「東アジア考古学における遺跡と遺物の総合的研究——特に中国渭河流域における遺跡調査を中心に」における調査活動報告

先周文化・西周文化研究は、1930年代から行われ、蘇秉琦氏が1934年から行った宝鸡市鬲鸕台遺跡の西周墓と土器の調査研究や、石璋如氏が1943年に行った渭河流域の周城・豊京・鎬京の位置に関わる西周時代遺跡の地理学的調査がよく知られている。しかし、遺跡・遺構・遺物の研究が広く開始されたのは1970年代後半からと言っても過言ではない。先周時代・西周時代にかかわる周城・豊京・鎬京の位置問題、西周王陵の探索は、今日においても大きな研究課題である。西周王朝の遺跡に関しては、考古学的な研究が日々進んでいるにもかかわらず相変わらず不明な点が多い。西周王陵の所在に関しては、2004年の秋、陝西省岐山県周公廟の北東に位置する陵坡で西周王侯貴族墓地が発見されたことによって解決したかに思われたが、現状では、結論は先送りされ未解決のままになりそうである。もし、文字資料の出土などによって間違いのない西周王陵が発掘されたのなら、それは21世紀最大の世界的な考古学の発見となるであろう。周公廟陵坡西周王侯貴族墓地の発見によって、その可能性に一步近づ

いたことはたしかである。西周の都城の所在に関しても、周城の位置に関する問題は、扶風県召陳村・雲塘遺跡、岐山県鳳雛村遺跡の発見によって1970年代から1980年に問題のすべてが解決したかに思われたが、岐山県周公廟南の西周建築群および遺跡群の発見や、西周水溝故城の発見によって揺るぎだした。先周・西周考古学は、相変わらず不明の点が多い、解決の待たれる課題が山積している。中国考古学を研究する者にとって先周・西周考古学は、相変わらず最も興味有る時代として横たわっている。

西周王朝の建国時期にかかわる歴史は、『尚書』『詩経』『史記』などの文献史料に記載がある。『詩経』大雅・緜篇には、

民之初生、自土沮漆、古公亶父、陶復陶穴、未有家室、古公亶父、来朝走馬、率西水滸、至于岐下、爰及姜女、聿来胥宇、周原膺膺。

と、周原に至った古公亶父を歌っている。

また『史記』周本紀および「集解」には、

古公亶父……乃與私屬逐去豳、渡漆沮、踰梁山、止于岐山。「集解」徐廣曰、岐山在扶風美陽西北。其南有周原。駟案皇甫謐云邑於周地、故始改國曰周。

とある。この「集解」によれば、六朝時代には、現在の武功県の西、武功鎮付近の漆水河西岸から、扶風県に至る一帯が周原と考えられていたものと推定される。現在、西安市から宝鶏市に向かう高速道路は、武功のインターチェンジを越えるとまもなく漆河を渡る。さらに『史記』周本紀には、

盡復歸古公於岐山下、及他邇国、聞古公仁、亦多歸之。於是古公乃貶戎狄之俗、而營築城郭室屋、而邑別居之。

とあり、岐下に於いて周が戎狄の風俗から抜け出し、築城し、邑を築いた様子を述べている。『竹書紀年』には殷武乙の元年に

……邠遷于岐周、三年……命周公亶父賜以岐邑。

と見られる。この古公亶父が、移った岐下または岐邑あるいは周城と呼ばれた地に関しては、文献上に多くの記載があるが、問題も多い。『漢書』地理志の美陽県下注には、

禹貢岐山在西北、中水郷周大王所邑。

とある。この中水郷と周城について、『水経注』渭水注は、

岐水……逕周城南、城在岐山之陽而近西、所謂居岐之陽之也、非直因山致名、亦指水稱矣、又歷周原下。北則中水郷成周聚、故曰有周也、水北即岐山矣。

とある。これによると、雍水の支流である岐水は、周城の南を流れ、周原の下を経て、その北が中水郷成周聚であるという。雍水および岐水の北の地に周城が存在したことは明らかであるが、これだけでは不明の点が多い。『左傳』昭公四年の条に、

成有岐陽之蒐。



とあり、この杜預注に、

周成王歸自奄、大蒐於岐山之陽、岐山在扶風美陽懸西北。

とある。これによって美陽県の西北に岐山があり、岐山之陽つまり岐山の南に、周成王が大蒐（春に狩りを行う）した周城があるならば、周城の位置は、美陽県の西北、岐山の南に位置していたことになる。いずれにしろ古公亶父から文王に至る周の本拠地に関しては、今の渭河の北岸、宝鶏市から武功市にいたるいずれかと見る考えが有力で、この地域を広い意味での「周原」と呼んできた。また現在の陝西省扶風県法門寺付近を漢代の美陽県と見る考えがあり、扶風県召陳村から岐山県鳳雛村一帯の齊家溝兩岸を狭い意味の「周原」遺跡と呼び、1980～1990年代にはこの地を古公亶父の周城とする考えが概ね定説となっていた。

2000年代に入って以来、駒澤大学考古学研究室が飯島武次を中心に関わってきた陝西省渭河流域の考古学研究と調査は以下のような経過をたどっている。

2001年9月17日より19日の3日間、扶風県、岐山県の周原遺跡を視察し、周原遺跡における野外考古学研究と駒澤大学考古学実習実施の可能性を検討する。

2003年9月5日より駒澤大学考古学専攻の学生と共に、予てから希望していた周原に位置する扶風県李家村西遺跡の実習に参加した。実習は8日の予定であったが、地権者との紛争問題と雨天のため、調査条件は悪く、3日半しか発掘現場に出られなかったが、陶範破片の出土もあり、周原における初めての実習として一応の実習成果を上げる。駒澤大学の学生は9月16日に帰国、その後、北京大学が過去に発掘した西周土器資料の写真撮影を行った。北京大学の発掘実習は12月まで継続され、翌2004年の1月まで整理作業も行われた。

2003年11月、南山大学における日本中国考古学会大会において、北京大学考古文博学院・徐天進教授より齊家溝兩岸の所謂周原遺跡は周城でない可能性があるとの見解が示された。齊家溝兩岸出土の青銅器に姫姓・周王室の青銅器がほとんど無いことや、岐山県周公廟の南では西周時期に属する縄紋埴が発見されるなどの状況説明があった。この徐天進教授の新見解はそれまでの狭い意味の「周城」遺跡に対する認識の変更を求めるものであった。そして岐山県周公廟付近の西周遺跡の重要性が新たに認識された。

2003年12月、北京大学の李家村西遺跡における発掘実習が終了し、その後、12月14日に岐山県祝家巷北遺跡の一般調査において北京大学学生が甲骨文を発見したとの連絡を受けた。11月の徐天進教授見解に基づいて李家村西遺跡発掘終了後、岐山県周公廟南一帯の一般調査を行った結果である。

2003年12月20日、飯島は西安市でのユネスコの会議に出席した後、足を伸ばして甲骨文発見の現場を徐天進教授の案内で訪れた。周公廟南の祝家巷北遺跡、甲骨文発見

地点の周囲を歩いたが、多くの西周磚、西周・先周時期の高足、高口縁が散布していた。徐天進教授の話では高領袋足分襠鬲、空心磚、三足甕などの破片も多いとのことであった。祝家巷北遺跡から北を見て、岐山山塊の鳳凰山の写真を撮影するが、この写真には翌年発見される周公廟西周王侯貴族墓地の位置する陵坡の尾根が偶然にも入っていた。岐山の山麓斜面を登り、周公廟に至り、周公廟の写真撮影を行った。一方、徐天進教授、北京大学の学生は周公廟東北の陵坡尾根の一般調査に向かった。その後、夕方の周公廟門前の雑談では、祝家巷北遺跡の状況が西周考古学の上で興味深いので、2004年9月の考古学実習をこの遺跡に予定するとの話も出た。

2004年の4月下旬に、北京大学考古文博学院・徐天進教授から5月に祝家巷北遺跡の試掘を開始するので、この5月に駒澤大学の考古学実習を行わないかとの照会があった。しかし、新学年開始直後で3年生の実習学生を連れての5月の参加計画は時間的に無理であった。

2004年5月、陝西省考古研究所・北京大学考古文博学院が、周公廟の北東尾根・陵坡において亜字形の西周王陵を発見したとのニュースが報道された。その後、この鑽探調査の結果と成果は、相次いで『文博』紙上に掲載される<sup>(55)</sup>。西周時代の亜字形墓の発見は、殷墟遺跡に準ずる重要な遺跡との判断が下され、中国側の厳重な警備体制と厳格な発掘体制が組まれた。そのため9月に駒澤大学が予定していた当地での考古学実習は不可能となった。

駒澤大学考古学研究室は、2004年9月になって、周公廟南の祝家巷北遺跡における実習に変わるものとして高陵県楊官寨遺跡における実習を執り行った。その発掘実習期間中の9月16日に周公廟西周王侯貴族墓地における発掘の見学に出かけた。18号墓の表土剥ぎが開始されていた。18号墓の位置は、周公廟の東北側に張り出した尾根・陵坡の中段、海拔850m付近であった。

2005年1月になると、周公廟西周王侯貴族墓地M18・32号墓の発掘を終了する旨の連絡が入り、発掘完了の状態を見るために、飯島武次ほか日本人考古学者9名で遺跡見学に訪中した。また水溝村西周故城の発見が伝えられ、その故城址も見学し、さらに宝鷄青銅器博物館にて1975年に岐山県董家村から出土した青銅器を見、それらの写真撮影を行った。

2005年2月、金沢大学にて「周公廟遺跡の発見と西周考古学の新展開」のシンポジウムが開催され、飯島は、「周原遺跡と周公廟遺跡の研究調査」の題目で発表。また北京大学徐天進教授による周公廟西周王侯貴族墓地M18・32号墓の発掘報告が行われた。いずれの墓もひどい盗掘を受け、顕著な出土遺物は発見されていなかった。

21世紀の考古学における最大の発見になるかもしれない周公廟西周王侯貴族墓地と周囲の西周遺跡の発掘は2004年から開始された(写真1)。周公廟西周王侯貴族墓地



写真1 周公廟遺跡から陵坡の西周王侯貴族墓地



写真2 周公廟西周王侯貴族墓地土壘

に関しては、ボーリング調査とGPS測量により大墓の分布の概略が明らかとなっている。周公廟考古隊 workstation で見たGPSによる測量図では、周公廟の東側に大殿溝と馬尾溝の二つの谷に挟まれた北から南に下る尾根が存在し、陵坡の名称で呼ばれている。この海拔800~900m付近の尾根に沿って南北約450m、東西約200mの範囲に37基の古墓の存在が確認されている。その中には大型墓22基が存在し、その内訳は、垂字形墓10基、卜字形墓4基、中字形墓4基、甲字形墓4基であるという。ボーリング調査であるため発掘を行うとこの数値に若干の変化があるかもしれない<sup>(56)</sup>。周公廟西周王侯貴族墓地の東には残長700m、北には長300m、西には残

長500m、厚さ約10mの版築の土壘が取りまいている(写真2)。この版築土壘内には、陵坡の西周大墓群以外の遺跡は存在しないので、版築土壘は西周大墓群を取り囲む施設と考えられている。また、周公廟西周王侯貴族墓地の西600mでは、白草坡西周墓地が発見されている。周公廟の南から南東に広がる岐山山麓斜面には、先周・西周時代遺物散布地が広がり、西周甲骨出土遺構(廟王村遺跡)、西周甲骨・陶範出土遺構(祝家巷北遺跡)、大型建築址(周公廟遺跡)などが確認された。

殷墟遺跡においては、1920年代から1950年代に、洹河北岸の西北岡侯家莊および武官村に到る一帯の東西約450m、南北約200mの範囲で、殷の王陵と称される12(13)基の大墓が発見されている。これら12基の大墓のうちM1001・1002・1003・1004・1217・1500・1550・1400号墓の8基が垂字形墓で、M1129・1443号墓と武官村大墓の3基が中字形墓で、司母戊鼎を出土したと伝えられる大墓も甲字形墓であった。ほかに未完成墓と推定される1567号と呼ばれる大坑1基も存在する。この1567号坑を含むと大墓は13基となる。武官村側のM1400号墓の西側には南北約200m、東西約150mにわたって

多数の祭祀坑が密集している。一説によれば、これら12（13）基の墓の被葬者は殷後期にあたる19代盤庚から30代帝辛紂いたるいずれかの殷王であると言うが、その証拠はない。殷墟西北岡侯家荘の殷王陵の墓域は東西に長く、周公廟西周王侯貴族墓地墓域は南北に長いが、その面積はほとんど同じである。垂字形墓の数においては、周公廟西周王侯貴族墓地がまさっている。墓の規模においては、殷墟のM1217号墓が墓道を含む南北長が120.19m有るのに対して周公廟西周王侯貴族墓では最大規模の垂字形墓でも約南北75m、東西約53mほどである。墓道の幅は、殷墟のM1001号墓は7～8mあるが、周公廟西周王侯貴族墓では5m～0.8mと異常に狭い物も存在する。

西周王陵は殷墟の王陵に匹敵する規模の墓と推定され、上記の状況からは、周公廟西周貴族墓地は西周王室の墓地ではなく、周公一族の墓地であった可能性が高いとの考えが有力に成りつつある。しかし、殷後期において、垂字形墓は王墓であった。周公廟陵坡遺跡の垂字形墓も西周王墓の可能性は依然として高い。また規模の点においては、確かに殷墟王陵群における最大のM1217号墓は南北長さ120.19mに達しているが、殷墟遺跡でもM1550号墓は南北長さ47.55mと比較的規模が小さい。周公廟西周王侯貴族墓地北端にある最大規模の垂字形墓は、南北長さ75mほどで、これは殷墟王陵群の中程度の規模となる。従って周公廟西周王侯貴族墓群に西周王墓が含まれている可能性は未だ高い。

以上の先学の研究と筆者のこれまでの周原考古学研究を踏まえて、平成17年度駒澤大学特別研究助成金（共同研究）「東アジア考古学における遺跡と遺物の総合的研究——特に中国渭河流域における遺跡調査を中心に」の一部を用いて行った2005年度の渭河流域を中心とした考古学調査活動は以下の通りである。

8月5日から17日まで筆者（飯島武次）は、中国陝西省西安市・宝鶏市で開催された「周原考古与西周文化国際学術討論会」に参加し、「日本における周原考古学研究的現状」の題目で研究発表を行い、同期間中に博物館における遺物撮影、遺跡見学を行った。この間の調査研究活動により、多くの西周時代青銅器の撮影資料、西周時代土器の撮影資料を持ち帰った。調査研究活動の旅行行程は以下の通りである。

8月5日 成田発。咸陽国際空港着。西安市泊。

8月6日 岐山県鳳雛村甲組建築址見学。写真撮影を行う。扶風県泊。

岐山県周原博物館で遺物撮影。扶風県召陳周原博物館で遺物撮影。

8月7日 岐山県廟王村出土甲骨写真撮影。岐山県周公廟陵坡西周墓地M18号墓、M32号墓発掘現場見学。岐山県泊。

8月8日 鳳翔県水溝村西周故城踏査。鳳雛県博物館見学。宝鶏青銅器博物館にて、眉県楊家村2003年1月出土の西周青銅器の写真撮影を行う。約60点の青銅器を撮影。宝鶏市泊。

- 8月9日 「日本における周原考古学研究的現状」の題目で発表。終日研究討論会。宝鶏市泊。
- 8月10日 西安市長安区貢里村で行われてた戦国時代秦国の垂字形墓の発掘を見学。後に秦始皇帝の祖母・夏太后の墓との報道あり。西安市泊。
- 8月11日 陝西省韓城市の梁代村遺跡へ。西周春秋時代の車馬坑・甲字形墓・中字形墓発掘現場を見学。棺側に取り付けられた青銅魚形器・青銅円形器・陶玉の出土状況を見る。韓城市泊。
- 8月12日 山西省絳県横水村の両周大墓の発掘現場を見学。侯馬市泊。
- 8月13日 侯馬市の山西考古研究所にて横水村遺跡の出土資料、北趙晋侯墓出土資料の調査を行う。その後、西安にもどる。西安市泊。
- 8月14日 陝西省藍田県公王嶺の旧石器遺跡踏査。西安市泊。
- 8月15日 西安市より飛行機で、北京市へ。北京大学考古文博学院・李伯謙教授に連絡。北京市泊。
- 8月16日 北京大学考古文博学院・李伯謙教授を表敬訪問。9月8日からの周公廟遺跡調査の打ち合わせ。中国社会科学院考古研究所・許宏教授表敬訪問。二里頭遺跡出土資料の調査。北京市泊。
- 8月17日 旧協和医学校（北京原人資料の研究が行われた医学校）の写真撮影。北京国際空港から成田へ。帰国。

続いて2005年9月8日から20日まで、渭河流域の西周時代遺跡に関する研究調査を行った。この間、駒澤大学教員4名（教授・飯島武次、教授・酒井清治、助教授・設楽博己、非常勤講師・古庄浩明）と学生16名が、中国陝西省岐山県周公廟遺跡におい



写真3 考古学実習参加者全員の記念写真

て行われた北京大学考古文博学院の考古学発掘実習に参加した。遺跡は周公廟遺跡の陵坡西周王侯貴族墓地M18号墓の南西約700mに位置する西周時代の建築遺跡群である（写真3）。鑽探（ボーリング）調査の結果、この建築群は南北約300m、東西約90mの範囲に複数の版築基壇が残っている

と推定されている。この遺跡の北部の南北50m、東西20mの範囲で実習が行われた。建築址の上面は削平されていたが、先周時代の陶鬲片、西周時代の陶鬲片、空心埴片の出土もあった。調査期間中の18日には、学生を引率して鳳翔県の秦公一号墓および宝鶏市の宝鶏青銅器博物館の見学を行った。この期間の研究活動により、多くの西周関係遺跡撮影資料、遺物記録資料などを入手した。

9月8日 成田国際空港から考古学専攻学生（3・4年生）13名、大学院生3名を引率して成田国際空港から中国咸陽国際空港へ。岐山県泊。

9月9日 周公廟遺跡発掘現場へ。作業打ち合わせ。岐山県泊。

9月10日 周公廟遺跡発掘現場へ。遺跡見学、発掘作業。岐山県泊。

9月11～15日 周公廟遺跡発掘現場へ。考古学実習、遺構確認、図面作製作業。岐山県泊。

9月16日 午前中雨のため法門寺および召陳周原博物館見学、午後考古学実習。岐山泊。

9月17日 周公廟遺跡発掘現場へ。考古学実習。岐山県泊。

9月18日 鳳翔県秦公一号墓見学、宝鶏青銅器博物館見学。岐山県泊。

9月19日 周公廟遺跡発掘現場へ。考古学実習、図面作製作業。夜、駒澤大学学生と北京大学学生の送別会。岐山県泊。

9月20日 北京国際空港から成田へ。帰国。

なお、ここまでの2003年12月から2005年に至る間の岐山県周公廟遺跡の調査と発掘に関しては、北京大学考古文博学院・徐天進教授による「周公廟遺址の考古所獲及所思」（『文物』2006年第8期、55～62頁）に詳しく経緯が発表されている<sup>(57)</sup>。徐天進教授によれば、周公廟遺跡の先周文化層（殷墟第4期）が西周時期の文化層に切られている点から、今日残る周公廟遺跡の遺構の時期は、古公亶父の岐邑の時期ではないと言う。遺構の年代からは周公の采邑である可能性が高いと言う。

『史記』項羽本紀には「殷墟」の地名が、また『春秋左傳』定公四年の条には、「夏墟」の単語が出てくる。中国古典上に「周墟」の名称を知らないが、周公廟遺跡の大墓群、宮殿址、塵穴灰坑群、生産遺跡群の配置状況は、殷墟のそれを思わすものがあり、周公廟遺跡が「周墟」である可能性も高いと信じる。周公旦の時期、周王が今日発見されている遺跡の何処に居住していたか知らないが、采邑自体が周墟内の一部を形成していると考えても良いであろう。

## 【註】

- (1) 3 飯島武次、1985、『夏殷文化の考古学研究』（山川出版社、151～183頁）。6 飯島武次、2006、「二里頭文化の陶鬲と粟粥」（『生業の考古学』同成社、216～

239頁)。

- (2) 15 許宏 A、2004、「二里頭遺跡における考古学的新収穫とその初歩的研究——集落形態を中心として——」(『中国考古学』第4号、日本中国考古学会、写真6)。
- (3) 6 飯島武次、2006、「二里頭文化の陶鬲と粟粥」(『生業の考古学』同成社、第1～4図)。
- (4) 38 中国社会科学院考古研究所河南二隊、1982、「河南臨汝煤山遺址発掘報告」(『考古学報』1982年第4期)。
- (5) 34 中国社会科学院考古研究所、1991、『中国考古学中碳十四年代数据集1965～1991』(『考古学專刊』乙種第二十八号)。
- (6) 35 中国社会科学院考古研究所、1995、『二里頭陶器集粹』(『考古学專刊』乙種第三〇号、31頁)。
- (7) 11 河南省文物研究所・中国歴史博物館考古部、1992、『登封王城岡与陽城』(文物出版社、北京)。
- (8) 44 鄭光、1995、「二里頭陶器文化論略(代前言)」(『二里頭陶器集粹』考古学專刊乙種第三〇号、23頁)。
- (9) 13 河南省文物考古研究所、2003、「鄭州商城新発現的幾座商墓」(『文物』2003年第4期、4～20頁)。この報告書では87M1号墓を二里岡下層に属するとし、T166M6号墓を二里頭文化に属するとするが、いずれも二里岡下層に属する墓である。従ってこの2基の墓から出土した青銅器は二里岡下層に属する遺物である。
- (10) 龍紋と蛇紋の区別は難解である。長身の動物紋で明らかに蛇を表現している物を「蛇紋」の名称で呼び、長身動物を象徴的に描いている場合には便宜的に「龍紋」と呼ぶことにする。この「龍」は後代の四神の龍を意味しているわけではない。
- (11) 30 中国科学院考古研究所洛陽発掘隊、1965、「河南偃師二里頭遺址発掘簡報」(『考古』1965年第5期、図版3)。
- (12) 同上。46 杜金鵬・許宏、2005、『偃師二里頭遺址研究』(科学出版社、北京)。
- (13) 28 中国科学院考古研究所二里頭工作隊、1974「河南偃師二里頭早商宮殿遺址発掘簡報」(『考古』1974年第4期)。
- (14) 35 中国社会科学院考古研究所、1995、『二里頭陶器集粹』(『考古学專刊』乙種第三〇号、160頁)。
- (15) 17 許宏・陳国梁・趙海濤、2004、「二里頭遺址聚落形態的初歩考察」(『考古』2004年第11期、29頁、図版8)。

- (16) 20顧万發、2000、「試論新砦陶器蓋上的饗餐紋」(『華夏考古』2000年第4期)。
- (17) 33中国社会科学院考古研究所、1989、『洛陽發掘報告——1955~1960年洛陽澗濱考古發掘資料』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第三十八号)。
- (18) 14韓維周・丁伯泉・張永傑・孫宝徳、1954、「河南登封県玉村古文化遺址概況」(『文物参考資料』1954年第6期)。
- (19) 18黄河水庫考古工作隊河南分隊、1960、「河南陝県七里鋪商代遺址的發掘」(『考古学報』1960年第1期)。
- (20) 8河南省博物館、1973、「鄭州南関外商代遺址的發掘」(『考古学報』1973年第1期)。
- (21) 45鄭州市文物考古研究所、2004、『鄭州大師姑(2002~2003)』(科学出版社、北京、34頁)。
- (22) 同上。
- (23) 47林巳奈夫、1952、「龍について」(『史林』第35卷第3号、京都大学)。48林巳奈夫、1953、「殷周青銅器に現れる龍について 附論……殷周青銅器における動物表現形式二三について」(『東方学報』第二十三冊、『殷周青銅文化の研究』、京都大学)。
- (24) 揚子江ワニは、中国東南部揚子江下流域に生息する体長1.5~2 mほどの小型のワニである。現地では一時300頭程度にまで数が激変したとも伝えられている。揚子江ワニは、河の岸辺の地下にトンネル状の穴を掘り、小動物や魚を食べて生活をする。冬季はこの穴の中で冬眠をする。
- (25) 37中国社会科学院考古研究所、2000、『山東王因——新石器時代遺址發掘報告』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第四十五号)。
- (26) 58李濟、1968、『侯家莊・第六本・1217号大墓』(『中国考古報告集之三』中央研究院歴史語言研究所、23~27頁、図版16)。
- (27) 37中国社会科学院考古研究所、2000、『山東王因——新石器時代遺址發掘報告』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第四十五号、422頁)。
- (28) 49樋口隆康、1982、『樂器』(泉屋博古館、京都)。
- (29) 39中国社会科学院考古研究所山西工作隊・臨汾地区文化局、1983、「1978~1980年山西襄汾陶寺墓地發掘簡報」(『考古』1983年第1期)。50樋口隆康・徐萃芳、1993、『中国王朝の誕生』(読売新聞社大阪本社)。
- (30) 42中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊、2005、「河南偃師市二里頭遺址中心区的考古新發現」(『考古』2005年第7期、15頁)。
- (31) 31中国社会科学院考古研究所、1985、『殷墟青銅器』(『考古学專刊』乙種第二十四号、図23・56)。



- (32) 41中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊、1986、「1984年秋河南偃師二里頭遺址發見的幾座墓葬」（『考古』1986年第4期）。
- (33) 29中国科学院考古研究所二里頭工作隊、1976、「偃師二里頭遺址新發見的銅器和玉器」（『考古』1976年第4期）。
- (34) 42中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊、2005、「河南偃師市二里頭遺址中心区的考古新發現」（『考古』2005年第7期、15頁）。
- (35) 19湖北省博物館、1976、「盤龍城商代二里岡期的青銅器」（『文物』1976年第2期）。
- (36) 24石璋如、1980、『小屯·第一本·遺址的發現与發掘·丙編·殷墟墓葬之五·丙区墓葬』（『中国考古報告集之二』中央研究院歷史語言研究所、挿図56）。
- (37) 『呂氏春秋』先識覽に「周鼎著饗饗、有首無身、食人未咽、害及其身」とある。
- (38) 25陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、1979、『陝西出土商周青銅器（一）』（文物出版社、北京、51図）。
- (39) 4 飯島武次、1998、『故宫博物院12 青銅器』（日本放送出版協会、図版13）。
- (40) 26陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、1980、『陝西出土商周青銅器（三）』（文物出版社、北京、190図）。
- (41) 21上海博物館、1964、『上海博物館藏青銅器』（上海、30）。
- (42) 51北京市文物研究所、1995、『琉璃河西周燕国墓地』（文物出版社、北京、彩版5）。
- (43) 1安徽省博物館、1987、『安徽省博物館藏青銅器』（上海人民美術出版社）。
- (44) 22四川省文物考古研究所、1999、『三星堆祭祀坑』（文物出版社、北京、図9）。
- (45) 39中国社会科学院考古研究所山西工作隊・臨汾地区文化局、1983、「1978～1980年山西襄汾陶寺墓地發掘簡報」（『考古』1983年第1期）。50樋口隆康・徐萃芳、1993、『中国王朝の誕生』（読売新聞社大阪本社）。
- (46) 31中国社会科学院考古研究所、1985、『殷墟青銅器』（『考古学專刊』乙種第二十四号、図23・56）。
- (47) 32中国社会科学院考古研究所、1987、『殷墟發掘報告』（『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第三十一号、図版64）。
- (48) 27中国科学院考古研究所、1962、『澧西發掘報告』（『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第十二号、図版89）。
- (49) 51北京市文物研究所、1995、『琉璃河西周燕国墓地』（文物出版社、北京、図版94）。
- (50) 12河南省文物考古研究所、2001、『鄭州商城——1953～1985年發掘報告』（文物出版社、北京、767頁）。

- (51) 同上、彩版35。
- (52) 31中国社会科学院考古研究所、1985、『殷墟青銅器』（『考古学專刊』乙種第二十四号、図版80）。
- (53) 19湖北省博物館、1976、「盤龍城商代二里岡期的青銅器」（『文物』1976年第2期）。
- (54) 57李濟、1956、『小屯・第三本・殷墟器物：甲編、陶器：上輯』（『中国考古報告集之二』中央研究院歷史語言研究所）。

#### 以下「附記」註

- (55) 李学勤・石興邦他、2004、「周公廟西周墓葬群重大發現專家談」（『文博』2004年第5期、4～20頁）。馮建科、2004、「試論周公廟遺址的文化內涵及性質」（『文博』2004年第6期、39～43頁）。種建榮・雷興山、2005、「周公廟遺址甲骨坑H1發掘記」（『文博』2005年第1期、90～95頁）。種建榮・雷興山、2005、「周公廟遺址西周大墓与夯土圍牆發掘記」（『文博』2005年第3期、68～73頁）。
- (56) 周公廟考古隊、2004、「陝西岐山周公廟遺址考古收獲豐碩」（『中国文物報』第1280期）。
- (57) 徐天進、2006、「周公廟遺址的考古所獲及所思」（『文物』2006年第8期、55～62頁）。

#### 插图出典目錄

- 第1図 筆者作成集成図。
- 第2図 筆者作成集成図。
- 第3図 筆者作成集成図。
- 第4図 筆者作成集成図。
- 第5図 筆者作図。
- 第6図 46杜金鵬・許宏、2005、『偃師二里頭遺址研究』（科学出版社、北京、図版7）。
- 第7図 35中国社会科学院考古研究所、1995、『二里頭陶器集粹』（『考古学專刊』乙種第三〇号、447）。
- 第8図の1～3；28中国科学院考古研究所二里頭工作隊、1974「河南偃師二里頭早商宮殿遺址發掘簡報」（『考古』1974年第4期 図7）。4～6；30中国科学院考古研究所洛陽發掘隊、1965、「河南偃師二里頭遺址發掘簡報」（『考古』1965年第5期 図版3）。
- 第9図の1；36中国社会科学院考古研究所、1999、『偃師二里頭……1959年～1978年考古發掘報告』（『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第五十九号 図22）。2；

筆者作図。

第10図の1:30中国科学院考古研究所洛陽發掘隊、1965、「河南偃師二里頭遺址發掘簡報」(『考古』1965年第5期 図版3)。2:28中国科学院考古研究所二里頭工作隊、1974「河南偃師二里頭早商宮殿遺址發掘簡報」(『考古』1974年第4期 図7)。

第11図 17許宏・陳国梁・趙海濤、2004、「二里頭遺址聚落形態の初步考察」(『考古』2004年第11期、図版8)。

第12図 36中国社会科学院考古研究所、1999、『偃師二里頭……1959年～1978年考古發掘報告』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第五十九号 図199)。

第13図 筆者写真。

第14図 35中国社会科学院考古研究所、1995、『二里頭陶器集粹』(『考古学專刊』乙種第三〇号、170・171)。

第15図 17許宏・陳国梁・趙海濤、2004、「二里頭遺址聚落形態の初步考察」(『考古』2004年第11期、図版8)。

第16図 36中国社会科学院考古研究所、1999、『偃師二里頭……1959年～1978年考古發掘報告』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第五十九号 図199・200)。

第17図 36中国社会科学院考古研究所、1999、『偃師二里頭……1959年～1978年考古發掘報告』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第五十九号 図22・124)。

第18図 36中国社会科学院考古研究所、1999、『偃師二里頭……1959年～1978年考古發掘報告』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第五十九号 図124・125・199・200)。

第19図 20顧万癸、2000、「試論新砦陶器蓋上的饗餐紋」(『華夏考古』2000年第4期、図1)。

第20図 33中国社会科学院考古研究所、1989、『洛陽發掘報告——1955～1960年洛陽澗濱考古發掘資料』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第三十八号、図版33)。

第21図の1:14韓維周・丁伯泉・張永傑・孫宝徳、1954、「河南登封县玉村古文化遺址概況」(『文物参考資料』1954年第6期、図11)。2:18黄河水庫考古工作隊河南分隊、1960、「河南陝县七里鋪商代遺址的發掘」(『考古学報』1960年第1期、図16)。3:8河南省博物館、1973、「鄭州南関外商代遺址的發掘」(『考古学報』1973年第1期 図5)。

第22図 45鄭州市文物考古研究所、2004、『鄭州大師姑(2002～2003)』(科学出版社、北京、図24)。

第23図 筆者模写。

- 第24図 筆者写真。
- 第25図 58李济、1968、『侯家莊・第六本・1217号大墓』（『中国考古報告集之三』中央研究院歷史語言研究所、図版16）。
- 第26図 49樋口隆康、1982、『樂器』（泉屋博古館、京都、写真3）。
- 第27図 50樋口隆康・徐萃芳、1993、『中国王朝の誕生』（読売新聞社大阪本社、図版1）。
- 第28図 42中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊、2005、「河南偃師市二里頭遺址中心区的考古新發現」（『考古』2005年第7期、図版6）。
- 第29図 同上。
- 第30図 31中国社会科学院考古研究所、1985、『殷墟青銅器』（『考古学專刊』乙種第二十四号、図23・56）。
- 第31図 46杜金鵬・許宏、2005、『偃師二里頭遺址研究』（科学出版社、北京、図版6）。
- 第32図 29中国科学院考古研究所二里頭工作隊、1976、「偃師二里頭遺址新發現的銅器和玉器」（『考古』1976年第4期、図6）
- 第33図の1：19湖北省博物館、1976、「盤龍城商代二里岡期的青銅器」（『文物』1976年第2期、図31）。 2：24石璋如、1980、『小屯・第一本・遺址的發現与發掘・丙編・殷墟墓葬之五・丙区墓葬』（『中国考古報告集之二』中央研究院歷史語言研究所、挿図56）。
- 第34図の1：25陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、1979、『陝西出土商周青銅器（一）』（文物出版社、北京、51図）。 2：4飯島武次、1998、『故宫博物院12 青銅器』（日本放送出版協会、図版13）。 3：26陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員会・陝西省博物館、1980、『陝西出土商周青銅器（三）』（文物出版社、北京、190図）。
- 第35図の1：21上海博物館、1964、『上海博物館藏青銅器』（上海、30）。 2：51北京市文物研究所、1995、『琉璃河西周燕国墓地』（文物出版社、北京、彩版5）。
- 第36図の1：1安徽省博物館、1987、『安徽省博物館藏青銅器』（上海人民美術出版社、図版1）。 2：22四川省文物考古研究所、1999、『三星堆祭祀坑』（文物出版社、北京、図9）。
- 第37図 筆者模写
- 第38図 筆者写真
- 第39図 30中国科学院考古研究所洛陽發掘隊、1965、「河南偃師二里頭遺址發掘簡報」（『考古』1965年第5期、図版5）。
- 第40図 筆者写真
- 第41図 31中国社会科学院考古研究所、1985、『殷墟青銅器』（『考古学專刊』乙種第

二十四号、図版80)。

第42図の1・2・4・5・6；9河南省文化局文物工作隊、1959、『鄭州二里岡』（『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第七号、図31）。3；10河南省文化局文物工作隊第一隊、1957、「鄭州商代遺址的發掘」（『考古学報』1957年第1期、図13）。7；2安志敏、1954、「一九五二年秋季鄭州二里岡發掘記」（『考古学報』第八冊、図10)

第43図の1・2；19湖北省博物館、1976、「盤龍城商代二里岡期的青銅器」（『文物』1976年第2期、図30）。3；57李濟、1956、『小屯・第三本・殷墟器物：甲編、陶器：上輯』（『中国考古報告集之二』中央研究院歷史語言研究所、図版59)。

### 附記写真

写真1 筆者写真

写真2 筆者写真

写真3 筆者写真

### 【引用文献】

1. 安徽省博物館、1987、『安徽省博物館藏青銅器』（上海人民美術出版社）
2. 安志敏、1954、「一九五二年秋季鄭州二里岡發掘記」（『考古学報』第八冊）
3. 飯島武次、1985、『夏殷文化の考古学研究』（山川出版社）
4. 飯島武次、1998、『故宮博物院12 青銅器』（日本放送出版協會）
5. 飯島武次、2003、『中国考古学概論』（同成社）
6. 飯島武次、2006、「二里頭文化の陶鬲と粟粥」（『生業の考古学』同成社、216～239頁）
7. 夏鼐、1962、「新中国的考古学」（『考古』1962年第9期）
8. 河南省博物館、1973、「鄭州南関外商代遺址的發掘」（『考古学報』1973年第1期）
9. 河南省文化局文物工作隊、1959、『鄭州二里岡』（『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第七号）
10. 河南省文化局文物工作隊第一隊、1957、「鄭州商代遺址的發掘」（『考古学報』1957年第1期）
11. 河南省文物研究所・中国歴史博物館考古部、1992、『登封王城岡与陽城』（文物出版社、北京）
12. 河南省文物考古研究所、2001、『鄭州商城——1953～1985年發掘報告』（文物出版社、北京）
13. 河南省文物考古研究所、2003、「鄭州商城新發現的幾座商墓」（『文物』2003年第

- 4 期)
14. 韓維周・丁伯泉・張永傑・孫宝徳、1954、「河南登封縣玉村古文化遺址概況」(『文物參考資料』1954年第6期)
  15. 許宏A、2004、「二里頭遺跡における考古学的新収獲とその初歩的研究——集落形態を中心として——」(『中国考古学』第4号、日本中国考古学会)
  16. 許宏B、2004、「二里頭遺址発掘和研究的回顧与思考」(『考古』2004年第11期)
  17. 許宏・陳国梁・趙海濤、2004、「二里頭遺址聚落形態的初歩考察」(『考古』2004年第11期)
  18. 黄河水庫考古工作隊河南分隊、1960、「河南陝県七里鋪商代遺址の発掘」(『考古学報』1960年第1期)
  19. 湖北省博物館、1976、「盤龍城商代二里岡期的青銅器」(『文物』1976年第2期)
  20. 顧万發、2000、「試論新砦陶器蓋上的饗餐紋」(『華夏考古』2000年第4期)
  21. 上海博物館、1964、『上海博物館藏青銅器』(上海)
  22. 四川省文物考古研究所、1999、『三星堆祭祀坑』(文物出版社、北京)
  23. 徐旭生、1959、「1959年夏豫西調查“夏墟”的初歩報告」(『考古』1959年第11期)
  24. 石璋如、1980、『小屯・第一本・遺址の発現与発掘・丙編・殷墟墓葬之五・丙区墓葬』(『中国考古報告集之二』中央研究院歷史語言研究所)
  25. 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員會・陝西省博物館、1979、『陝西出土商周青銅器(一)』(文物出版社、北京)
  26. 陝西省考古研究所・陝西省文物管理委員會・陝西省博物館、1980、『陝西出土商周青銅器(三)』(文物出版社、北京)
  27. 中国科学院考古研究所、1962、『澧西発掘報告』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第十二号)
  28. 中国科学院考古研究所二里頭工作隊、1974「河南偃師二里頭早商宮殿遺址発掘簡報」(『考古』1974年第4期)
  29. 中国科学院考古研究所二里頭工作隊、1976、「偃師二里頭遺址新発現的銅器和玉器」(『考古』1976年第4期)
  30. 中国科学院考古研究所洛陽発掘隊、1965、「河南偃師二里頭遺址発掘簡報」(『考古』1965年第5期)
  31. 中国社会科学院考古研究所、1985、『殷墟青銅器』(『考古学專刊』乙種第二十四号)
  32. 中国社会科学院考古研究所、1987、『殷墟発掘報告』(『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第三十一号)
  33. 中国社会科学院考古研究所、1989、『洛陽発掘報告——1955~1960年洛陽澗濱考

- 古発掘資料』（『中国田野考古報告集』 考古学専刊丁種第三十八号）
34. 中国社会科学院考古研究所、1991、『中国考古学中碳十四年代数据集1965～1991』（『考古学専刊』 乙種第二十八号）
  35. 中国社会科学院考古研究所、1995、『二里頭陶器集粹』（『考古学専刊』 乙種第三〇号）
  36. 中国社会科学院考古研究所、1999、『偃師二里頭……1959年～1978年考古発掘報告』（『中国田野考古報告集』 考古学専刊丁種第五十九号）
  37. 中国社会科学院考古研究所、2000、『山東王因——新石器時代遺址発掘報告』（『中国田野考古報告集』 考古学専刊丁種第四十五号）
  38. 中国社会科学院考古研究所河南二隊、1982、「河南臨汝煤山遺址発掘報告」（『考古学報』 1982年第4期）
  39. 中国社会科学院考古研究所山西工作隊・臨汾地区文化局、1983、「1978～1980年山西襄汾陶寺墓地発掘簡報」（『考古』 1983年第1期）
  40. 中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊、1984、「偃師二里頭遺址1980～1981年Ⅲ区発掘簡報」（『考古』 1984年第7期）
  41. 中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊、1986、「1984年秋河南偃師二里頭遺址発現の幾座墓葬」（『考古』 1986年第4期）
  42. 中国社会科学院考古研究所二里頭工作隊、2005、「河南偃師市二里頭遺址中心区の考古新発現」（『考古』 2005年第7期）
  43. 陳文華・張忠寬、1987、「中国古代農業考古資料索引（十二）」（『農業考古』 1987年第1期）
  44. 鄭光、1995、「二里頭陶器文化論略（代前言）」（『二里頭陶器集粹』 考古学専刊乙種第三〇号）
  45. 鄭州市文物考古研究所、2004、『鄭州大師姑（2002～2003）』（科学出版社、北京）
  46. 杜金鵬・許宏、2005、『偃師二里頭遺址研究』（科学出版社、北京）
  47. 林巳奈夫、1952、「龍について」（『史林』 第35卷第3号、京都大学）
  48. 林巳奈夫、1953、「殷周青銅器に現れる龍について 附論……殷周青銅器における動物表現形式二三について」（『東方学報』 第二十三冊、『殷周青銅文化の研究』、京都大学）
  49. 樋口隆康、1982、『樂器』（泉屋博古館、京都）
  50. 樋口隆康・徐萃芳、1993、『中国王朝の誕生』（読売新聞社大阪本社）
  51. 北京市文物研究所、1995、『琉璃河西周燕国墓地』（文物出版社、北京）
  52. 北京大学考古学系・駐馬店市文物保護管理所、1998、『駐馬店楊莊……中全新世淮河上游的文化遺存与環境信息』（科学出版社、北京）

53. 楨林啓介、2005、「中国新石器時代における食文化体系とその変容……蒸具の多種化」(『中国考古学』第五号、日本中国考古学会)
54. 宮本一夫、2005、『中国の歴史 01』(講談社)
55. 姚孝遂・肖丁、1989、『殷墟甲骨刻辞類纂』(『吉林大学古籍研究所叢刊之六』中華書局)
56. 洛陽市文物工作隊、2002、『洛陽皂角樹……1992~1993年洛陽皂角樹二里頭文化聚落遺址発掘報告』(科学出版、北京)
57. 李濟、1956、『小屯・第三本・殷墟器物:甲編、陶器:上輯』(『中国考古報告集之二』中央研究院歴史語言研究所)
58. 李濟、1968、『侯家莊・第六本・1217号大墓』(『中国考古報告集之三』中央研究院歴史語言研究所)

(本学歴史学科教授)